

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 昭和43年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0000001196">https://doi.org/10.15084/0000001196</a>

昭和 43 年度

# 国立国語研究所年報

— 20 —

国立国語研究所

1969

## 刊行のことば

本書は、昭和43年度における研究および事業の経過について述べたものである。

43年度に刊行したものは次の通りである。

家庭における子どものコミュニケーション意識（報告33）

電子計算機による国語研究（Ⅱ）（報告34）

国語年鑑（昭和43年版）

昭和44年11月

国立国語研究所長

岩淵悦太郎

# 目 次

## 刊行のことば

昭和43年度の調査研究のあらまし	1
全国方言文法の対比研究	5
X線像による調音運動の研究	9
語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—	10
日本言語地図の作成のための研究—作図ならびに検証調査—	13
中学生の言語習得に関する研究—漢字習得—	15
就学前児童の言語能力に関する全国調査	33
言語の表現機能と伝達効果の研究	42
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	46
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	59
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	65
現代語の表記法に関する研究—送りがな・漢字—	69
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	77
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	81
図書の収集と整理	88
庶務報告	89

## 昭和43年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- |                            |                        |
|----------------------------|------------------------|
| (1) 全国方言文法の対比研究            | 話しことば研究室               |
| (2) X線像による調音運動の研究          | 話しことば研究室               |
| (3) 語の意味・用法の記述的研究          | —動詞・形容詞等— 書きことば研究室     |
| (4) 日本言語地図作成のための研究         | —作図ならびに検証調査— 地方言語研究室   |
| (5) 中学生の言語習得に関する研究—漢字習得—   | 国語教育研究室                |
| (6) 就学前児童の言語能力に関する全国調査     | 国語教育研究室                |
| (7) 言語の表現機能と伝達効果の研究        | 言語効果研究室                |
| (8) 明治時代語の研究               | —明治初期における漢語の研究— 近代語研究室 |
| (9) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究  | 第1資料研究室                |
| (10) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究  | 第2資料研究室                |
| (11) 現代語の表記法に関する研究         | —送りがな・漢字— 第3資料研究室      |
| (12) 電子計算機による語彙調査          | —新聞を資料とする— 言語計量調査室     |
| (13) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 |                        |
- (1) 全国方言文法の対比研究……前年度までの調査結果の整理を始めるとともに、別の二種類の臨地面接調査を、地点の数をふやして行なった。なお、各地方言の録音を文字化したテキストを作成した。
- (2) X線像による調音運動の研究……標準語の個々の音節を発音するさいのX線映画フィルムを作成し、調音運動の分析を行なった。

- (3) 語の意味・用法の記述的研究—動詞・形容詞等—……前年度に続いて、語の意味を区別する特徴について分析・記述した。なお、動詞・形容詞の用例カードの補充として約6万枚を採集・整理した。
- (4) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—……『日本言語地図』第4集（生活・農業に関する名詞などの言語地図50面と、調査地点の産業図1面）の編修のための作業を行なった。なお、この資料の位置づけ、意味づけのための検証調査を新潟県糸魚川市で実施した。
- (5) 中学生の言語習得に関する研究—漢字習得—……これまでに実施してきた諸調査の結果を分析整理し、さらに事例調査の対象となった生徒の全教科にわたる使用教科書の漢字提出状況を調査した。これらの結果をまとめるため、報告書『中学生の漢字習得に関する研究』の執筆を始めた。なお、中学校卒業段階で問題を持ち越した漢字についての読み書き能力などをみるため、卒業直前の高校生について調査を実施した。
- (6) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……前年度に実施した文字力の調査結果の処理を進めるとともに、新しく語彙力の調査を行なった。対象として、東京、東北、近畿各地方の幼稚園から延べ36園、918名の就学前児童、(4, 5歳児クラス)を抽出し、基本的な語の理解水準をテスト法によって明らかにした。一方、被調査園、家庭を対象にアンケート調査を実施し、就学前児童の言語生活に関する実態を調査した。
- (7) 言語の表現機能と伝達効果の研究……「言語表現における場面の効果の研究」と「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」とに分かれる。前者は、本年度から「主語の形式」と「述語の形式」とを並行して分析しはじめた。後者は、二つの幼稚園から年中児、年少児の資料を録音採集し、また、これと別に自由な場面での幼児の発話も録音採集して、それぞれ文字化した。なお、採集ずみの資料に基づいて、文末形式の種類と名詞の格の使い方とについて分析を進めた。
- (8) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—……明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照するために、

- ①漢語に関する著書・論文目録の作成，②翻訳小説『花柳春話』の用例採集とその分析，③近代語文獻資料の調査などの研究を行なった。
- (9) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……前年度まで，主として理論的側面を研究してきた課題のうち，①言語単位の自動分割，②漢字の自動解読，③活用形の終止形変換，④層別，類別語彙表の作成システム等について，実際のシステム設計と実験とを行ない，所期の結果を得ることができた。
- (10) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……前年度に引き続き，福島県保原地区および茂庭地区について，音韻体系と文法体系の補正調査を行ない，また，録音資料について分析した。さらに，東北・九州地方において，参照調査を行なった。また，社会構造と方言語彙との関係をみるために，親族語彙，特に同族団をさし示す俚言を中心に調査した。
- (11) 現代語の表記法に関する研究—送りがな・漢字—……「文字使用の実態調査」と「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」とに分かれる。前者は，前年度調査した結果の集計作業を進め，結果表の作成と分析とを行ないつつ，報告書のまとめにとりかかった。後者は，前年度に引き続き，長単位語データによる機械処理に重点を置いて実施し，いくつかの漢字表を作成した。また，それに基づいて漢字の量的構造に関する実験的な分析を行なった。
- (12) 電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—……前年度に引き続き，新聞語彙調査の作業を実施し，全体の三分の一に当たる一紙一年分について，中間的な結果をまとめるために，短単位語の処理を中心として行なった。なお，長単位語について，簡易五十音順表，度数順層別表，層内順位表などの語彙表を作成した。
- (13) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査し，『国語年鑑』の資料として整理した。

本年度の研究組織は次の通りである。(昭和43年4月1日現在)

- ◇第1研究部 部長 野元 菊雄
- |          |           |       |      |
|----------|-----------|-------|------|
| 話しことば研究室 | 上村 幸雄(室長) | 高田 正治 |      |
| 書きことば研究室 | 西尾 寅弥(室長) | 宮島 達夫 |      |
| 地方言語研究室  | 徳川 宗賢(室長) | 佐藤 亮一 | 高田 誠 |
- ◇第2研究部 部長 輿水 実
- |         |           |       |       |
|---------|-----------|-------|-------|
| 国語教育研究室 | 芦沢 節(室長)  | 村石 昭三 | 根本今朝男 |
|         | 天野 清      | 中村 明  |       |
| 言語効果研究室 | 高橋 太郎(室長) | 大久保 愛 |       |
- ◇第3研究部 部長 斎賀 秀夫
- |        |           |       |       |
|--------|-----------|-------|-------|
| 近代語研究室 | 斎賀 秀夫(室長) | 飛田 良文 | 松井 利彦 |
|--------|-----------|-------|-------|
- ◇第4研究部 部長 林 四郎
- |         |           |       |       |
|---------|-----------|-------|-------|
| 第1資料研究室 | 田中 章夫(室長) | 南 不二男 | 江川 清  |
|         | 中野 洋      |       |       |
| 第2資料研究室 | 飯豊 毅一(室長) | 渡辺 友左 |       |
| 第3資料研究室 | 石綿 敏雄(室長) | 土屋 信一 | 野村 雅昭 |
| 言語計量調査室 | 林 四郎(室長)  | 斎藤 秀紀 | 木村 繁  |



# 全国方言文法の対比研究

## A 目的・意義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力をえて、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査をおこなう。研究の重点を、方言の文法現象のうち、文の述語としてもちいられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査をおこなうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料をえることである。また、えられる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するためにやくだつはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年からおこなってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

## B 担当者

企画と運営とは、話しことば研究室の上村幸雄が担当し、衛藤蓉子がこれをたすけた。調査は、研究所の委嘱にもとづき、つぎにしるす49名の国立国語研究所地方研究員がおこなった。また、上村幸雄は調査の一部をおこない、調査結果の分析の作業には、主として衛藤蓉子があたった。

昭和43年度国立国語研究所地方研究員

担当地域	氏名	所属機関名<職名>
北海道1	石垣 福雄	札幌市立東栄中学校<校長>
北海道2	佐藤 誠	札幌大学外国語学部<教授>
青森	森松 本宙	弘前学院短期大学<助教授>
岩手1	坂口 忠	岩手県立教育センター<研究員>

岩手 <sup>2</sup>	佐藤	亨	県立一関第一高等学校<教諭>
秋田	北条	忠雄	秋田大学教育学部<教授>
宮城・山形	加藤	正信	東北大学文学部<助教授>
福島	渡辺	義夫	福島大学教育学部<講師>
茨城・千葉	野林	正路	千葉大学留学生部<助手>
栃木	多々良	鎮男	宇都宮大学教育学部<教授>
群馬・埼玉	外山	映次	埼玉大学教育学部<助教授>
東 <sup>1</sup> ・ 神奈川	後藤	和彦	フェリス学院大学<助教授>
東 <sup>2</sup> 京	大島	一郎	東京都立大学人文学部<助教授>
新潟	剣持	隼一郎	県立柏崎高等学校<教諭>
石川	岩井	隆盛	金沢大学法文学部<教授>
富山	川本	栄一郎	金沢大学教育学部<講師>
福井	佐藤	茂	福井大学教育学部<教授>
山梨	清水	茂夫	山梨大学教育学部<教授>
長野	馬瀬	良雄	信州大学人文学部<助教授>
岐阜	谷開	石雄	県立岐阜北高等学校<教諭>
静岡	日野	資純	静岡大学人文学部<助教授>
愛知	山田	達也	名古屋市立大学教養部<助教授>
三重	慶谷	寿信	東京都立大学人文学部<講師>
滋賀	奥村	三雄	岐阜大学教育学部<助教授>
京都	遠藤	邦基	光華女子大学<講師>
大阪	土部	弘	大阪教育大学<助教授>
兵庫 <sup>1</sup>	和田	実	神戸大学教養部<助教授>
奈良	西宮	一民	皇学館大学<教授>
和歌山	村内	英一	和歌山大学教育学部<教授>
鳥取	鏡味	明克	岡山大学教育学部<講師>
鳥根	広戸	惇	鳥根大学文理学部<教授>
岡山	虫明	吉治郎	県立岡山操山高等学校<教諭>
広島	近藤	四郎	県立呉宮原高等学校<教諭>

山口	佐藤	虎男	呉工業高等専門学校<助教授>
香川・徳島 兵庫2	加藤	信昭	徳島大学教育学部<助教授>
愛媛	杉山	正世	新田高等学校<教諭>
高知	土居	重俊	高知大学教育学部<教授>
福岡	岡野	信子	県立若松高等学校<教諭>
佐賀	神部	宏泰	熊本女子大学<助教授>
長崎	西島	宏	長崎大学教育学部<助教授>
		愛宕 八郎康隆	長崎大学教育学部<助教授>
熊本	秋山	正次	熊本大学教育学部<助教授>
大分	糸井	寛一	大分大学教育学部<助教授>
宮崎	岩本	実	宮崎大学教育学部<教授>
鹿児島	上村	孝二	鹿児島大学法文学部<教授>
沖縄1	仲宗根	政善	琉球大学文理学部<教授>
沖縄2	外間	守善	法政大学文学部<教授>
沖縄3	大城	健	琉球大学文理学部<助教授>
沖縄4	比嘉	成子	沖縄工業高等学校<教諭>
沖縄5	加治工	真市	浦添高等学校<教諭>

## C 本年度の経過

本年度は、つぎの2種類の調査をおこなった。

調査Ⅲ……調査Ⅰの調査項目の抜粋からなる調査で、約40項目。調査地点は全国で37か所。(なお、調査Ⅰについては年報18、18ページ以下参照)

調査Ⅳ……本年度はじめておこなった調査で、調査項目数は81。文の述語以外の位置にたつ名詞の文法的な形態(いいかえれば主として名詞につく各種の助詞の用法)をしらべることをおもなねらいとし、調査Ⅰで調べた述語の位置にたつ用言・体言の文法的な形態についての文例をえることを副次的なねらいとする。標準語的ないいかたをしるした文を被調査者にしめし、これを方言になおしてこたえてもらった。調査地点は全国で92か所。そのほとんど全部が調査Ⅰまたは

調査Ⅲの調査地点とかさなる。

二つの調査は、いずれも所定の調査票にしたがって臨地面接調査法によっておこない、調査者は調査結果を整理票、整理カードに記入して、これを話しことば研究室に報告した。

また、本年度は調査Ⅰの調査結果の整理をはじめた。

また、これまで、「各地方言の共通語との対照的研究」（年報15, 16, 17を参照）、「全国方言文法の対比研究」の期間を通じて、方言文法研究のための良質な資料をえることを目的として方言の録音と文字化したテキストの作成とを、地方言語研究室、話しことば研究室の室員の手で、また、外部の研究者に委託して、すすめてきたが、43年度までにつぎにあげるテキスト（「方言録音資料シリーズ」として謄写印刷）の作成をおえた。

シリーズナンバー	地名	編者名
1	鹿児島市	地方言語研究室
2	宮崎県都城市	話しことば研究室
3	鹿児島県川辺郡笠沙町	上村孝二
4	岐阜県不破郡垂井町岩手	奥村三雄
5	高知市朝倉米田	土居重俊
6	秋田県男鹿市脇本	北条忠雄
7	鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦	上村孝二
8	高知県幡多郡大方町	土居重俊
9	石川県羽咋郡志雄町荻市	岩井隆盛
10	愛知県小牧市藤島	山田達也
11	京都市	話しことば研究室

#### D 今後の予定

44年度には、調査結果の整理をすすめ、報告書を執筆する。報告書の刊行は45年度になるみこみである。

(上村)

# X線像による調音運動の研究

## A 目的・意義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的におこないたいとかがえている日本語音声の研究の一部をなすものである。音声の研究は、現代日本語の音声の音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などをあきらかにすることを目的としておこなう。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、また、病的異常のある音声も対象とすることがありうる。

## B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄と高田正治の2名が担当した。

## C 本年度の作業

本年度は、昨年からつづけてきたX線像による調音運動の研究をつづけ、標準語の個々の単音を発音する際のX線映画フィルム像の分析をおこなった。

## D 今後の予定

上の研究は44年度もつづける。また分析結果の一部を44年度中にまとめる。

(上村)

# 語の意味・用法の記述的研究

——動詞・形容詞等——

## A 目 的

現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を、言語作品の中で実際に使われた用例によって分析・記述すること。

## B 担 当 者

動詞は宮島達夫、形容詞等は西尾寅弥が担当し、高木翠が作業を助けた。

## C これまでの経過

この研究は昭和39年度に始められ、大量の用例カードを作成してから、一語一語についてのくわしい記述を行なった（各論と仮称）が、それは41年度で打ち切り、42年度から動詞全体、形容詞全体にわたる体系的・関係的な記述を目ざす総論にとりかかった。

## D 本年度の作業

昨年度につづいて、語の意味を区別する特徴について分析・記述する仕事を進めた。

なお、用例カードの補充として、科学説明文・論説文から動詞・形容詞等を約6万枚採集整理した。その作品名は年報19（昭和42年度）の7・8ページにかかげられているものと同一である。

この作業にあたって、作業補助者の仕事の速度を測った記録を次にかかげる。（測定とその記述は宮島達夫が行なった。）

### 作業能率についての報告

今後の作業の際の参考として、今回カードを追加したときにしらべた作業の能率を記録しておく。作業者A・B・C・D・Eは、みな女子学生（大学

2・4年生)であり、記録は、作業をはじめて数日して、ややなれたころの特  
 くに指定した1時間の作業結果についてである。一日じゅう作業をつづける  
 ばあいには、これよりも多少能率がおちるだろう。

〔採集〕

あらかじめ○印をつけてある原本と見くらべながら、1語につき1枚ず  
 つ、印をカードに転写していく作業。

(作業者) (作品) (カードの種類) (採集した語数)

A	総長就業と廃業	33	658
B	人格主義	46	709
A	ものの見方について	54	969

この作業には、採集者みずからの検査もふくまれている。ただし、ここで行  
 なった検査は、はじめから1語1語をつき合わせるのではない。原本には、  
 1種類のカードから何語ずつ採集しなければならないかが書きこんである。  
 採集者は、自分の採集したカード枚数がこれとあっているかどうかを確か  
 め、ちがっていたばあいだけに1語1語つき合わせるのである。「ものの見  
 方について」の能率がいいのは、採集・検査という2段階を簡略化して、採  
 集しながら数をかぞえ、合っていればつぎのカードにすすむ、というやり方  
 をとったためである。

〔五十音順配列〕

採集されて、作品ごとにまとまってページ順にならんでいるカードを、五  
 十音順にならべかえる作業。歴史的かなづかいのものは現代かなづかいにな  
 おし(「ゐる」→「いる」)、活用形は終止形にもどしている(「こない」  
 →「くる」)などの作業を頭の中でしながら配列しなければならない。まず、  
 ページ順になっているカードを、1字目の行によってわけると(つまり、  
 「書く」「聞く」「消す」をカ行に、「焼く」「呼ぶ」「行く」をヤ行  
 にと、ア行～ワ行の10項目に分類すること。行のなかをさらにカ、キ、ク、  
 ケ、コとわけることまではふくんでいない)の能率はつぎのとおり。

B 人格主義 1497枚

C ものの見方について 1347枚

C 総長就業と廃業 1401枚

つぎに、すでに第1字目がア行、カ行、サ行……とわかれているものについて、同じ行のなかをア・イ・ウ・エ・オ、カ・キ・ク・ケ・コ……とわける作業。

C カ行 1521枚

D ア行 1720枚

E サ行 1300枚

### E 今後の予定

44年度に総論を一応まとめて、45年度刊行を目標とする。

(西尾)



# 日本語地図作成のための研究

——作図ならびに検証調査——

## A 目 的

現代日本語の基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本語地図（全6集、各集言語地図50面、参考地図1面）を作成する。

あわせて、日本語地図に盛られている資料の性格を明らかにするための検証調査を行なう。

## B 担 当 者

地図作成については、野元菊雄第1研究部長の指導のもとに、地方言語研究室の徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、高田誠が共同してあたり、白沢宏枝、山本文子が協力した。また、非常勤職員W・A・グロートースほか多くの人の援助を受けた。

検証調査については、徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、高田誠、W・A・グロートースが参加した。

## C これまでの経過

日本語地図については、第1集を昭和41年3月（大蔵省印刷局からの売品は42年4月、再版は同年10月）に、第2集を昭和42年3月（売品は42年12月）に、第3集を昭和43年3月（売品は44年3月）に刊行してきた。

検証調査については、昭和40年6月に高知市で、昭和43年3月に宇都宮市で、すでに2回の調査を行ってきた。

高知市における検証調査では、1地点1名のおじいさんを被調査者とする日本語地図の資料に対して、おじいさんの中での個人差はないか、あるとしたらどの程度か、少年の場合かどうか、性別の違う場合はどうか、居住歴

の条件に合わない人の場合はどうかなど、被調査者に関する問題と、いわゆるくなぞなぞ式>質問によって得た日本言語地図の資料に対して、別種の質問法による結果はどの程度の差を示すかなど、質問法に関する問題とについて検証した。

宇都宮市における検証調査では、高知市における被調査者に関する検証をさらに深めるために、各年齢層について多数の被調査者を対象として調査した。この調査については、調査項目を選ぶにあたって、日本言語地図における方言分布の状況（付近に等語線が走っているかどうか）などを考慮した。

## D 本年度の作業

日本言語地図の作図・編修については、第3集売品刊行までの残務作業を行なうとともに、第4集（生活・農業に関する名詞など言語地図50面、参考地図として調査地点の産業図1面を含む）編修のための作業を行なった。この第4集は、昭和44年3月刊行の予定である。

検証調査については、昭和44年2月と3月とに、新潟県糸魚川市で次のような調査を行なった。日本言語地図の資料は、平均12km間隔に調査地点を選び、各地点1名のおじいさんについて調査した結果であるが、今回の検証調査では、地点の間隔を限界までちぢめ、いっぽう年齢に関しても各年齢層について調査した場合、どのような結果が現われるものか確かめようとした。調査項目としては、日本言語地図作成のための項目のほか、柴田武、W・A・グロータース、徳川宗賢、馬瀬良雄による「糸魚川言語地理学調査」の項目も援用した。調査地点27、被調査者約270、項目40である。

## E 今後の予定

日本言語地図の作図・編修の作業は、当然6集完結まで続ける。その期間に諸種の検証調査を企画し実行する。検証調査全般の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

（徳川）

# 中学生の言語習得に関する研究

## —漢字習得—

### A 目的・意義

中学生が、義務教育過程を終了するまでに、どれくらいの漢字をどのようにして習得するか、中学校3年間にわたり、事例的に、特定個人についての漢字の習得状況を、量的、質的に追跡調査し、中学生の文字習得の可能な量とその習得の過程・要因を推定しようとするものである。

上の目的のために、同一被調査者に当用漢字全数（読みは当用漢字の全音訓について）の読み書き調査を行なったこと、中学1年入学時から3年卒業時までの継続調査であること、漢字の習得過程・習得要因を推定しようとして習得要因調査もあわせ行なったことなどが、この調査の特色といえよう。

### B 担当者

芦沢節，根本今朝男，中村明（43. 7. 1. 話しことば研究室に配置換え）が担当，川又瑠璃子，小林信子（43. 7. 1 話しことば研究室から配置換え）がこれを助けた。そのうち，根本今朝男は，漢字習得要因調査および要因資料の収集整備（生徒・指導面），中学校の漢字学習指導の実態に関する調査，高校生を対象とした漢字の使用力の調査を，中村明は漢字習得要因調査（事例調査生徒の使用教科書の漢字出現状況調査）を担当，川又瑠璃子・小林信子は，漢字習得調査，教科書の漢字調査の集計整理作業に従事した。なお，数名の臨時補助者が，一部の集計作業を助けた。

### C これまでの経過

中学生の漢字習得を研究するために，次の諸調査を実施してきた。

#### I 中学生の漢字習得能力を把握するために

- 1 当用漢字全数（音訓）読み書き調査 年間2回（各1学期・3学期末）

8人の中学生を対象とした事例研究の方法をとり、昭和39年入学時より42年卒業時まで3年間にわたり、当用漢字全数読み書き調査（表外字の読み調査も含む）を継続して行なう。

（読み）当用漢字全数（1850字）の全音訓（3122音訓）について調べる。

（カードによる1対1方式）

（書き）当用漢字全数（1850字）について調べる。（原則として、生徒に親しいほうの読みかたをとる。問題用紙記入の集団調査方式）

（表外字の読み）生徒が自然に習得する表外字の範囲を推定するために、約1000字の表外字の読みの力をみる。あわせてその習得経路なども調べる。（集団調査方式）

#### 調査対象

調査の実施協力学校 北区稲付中学校（校長 長谷重幸氏 国語主任 吉村安夫氏 北区教育委員会指導主事 相川正志氏推薦による）

被調査者 昭和39年度新入生8人（男女各4。学級での平均的中学生）

#### 2 漢字習得上の問題点解明のためのテスト

特定の事例調査生徒に実施した全数調査結果の検証・解明のために、当該学年の中学生（集団）に全数調査で得た習得上の問題点を中心とした検証テストを行なう。（学年末1回）

2年時 東京の中学生（稲付中学校 四谷第二中学校 砂町中学校 教育大附属中学校 武蔵野第三中学校）365人

3年時 東京（稲付中学校・文海中学校） 大阪（箕面第一中学校・箕面第二中学校 止々呂美中学校） 名古屋（前津中学校・南陽中学校）の中学生 497人

#### Ⅱ 中学生の漢字習得の要因をさぐるために

漢字習得要因の諸資料の収集と整備

##### 1 事例調査生徒の漢字の習得要因調査資料の収集と整備

学校側からの提供資料（学校での成績，テスト結果，家庭環境・性格

の所見など)

研究所での調査資料(知能検査, 国語学力総合調査, 読書力検査, 読書調査, 漢字調査の感想など)

2 学習指導の実際についての情報の収集(担当教員からの3年間の指導の実際の報告など)

3 使用教科書の漢字出現状況調査

事例調査生徒の漢字習得要因という観点から, その使用教科書(国語および漢字習得と関係の深い他教科の教科書, 全九教科)の漢字出現状況を調査, 整理する。

Ⅲ 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査

中学生の漢字習得調査の一環として, 中学校の漢字学習指導が実際どのように行なわれているか, 教師は, 指導上の問題点の所在をどのように意識しているかなどについて, 全国的な規模で調査する。(質問紙調査)

これらの結果のおもなものは, これまで, そのつど, 中間報告として, その概略を, 「国立国語研究所年報(16・17・18・19)」に発表してきた。

## D 本年度の作業

本年度は, この研究のまとめの年にあたる。

I 報告書「中学生の漢字習得に関する研究」のまとめのために, 今まで実施した諸調査の結果を, 中学3年間という立場で分析整理し, 考察を加える。さらに漢字習得調査結果と, 習得要因調査結果との関係を分析整理し, 考察を加えるなど報告書作成のためのまとめの作業に従事した。

この研究作業のうち, 事例調査生徒が使用した全教科にわたる教科書の漢字出現状況調査は, これまで報告したことがないので, その一部を報告することにする。([付]「中学校の教科書における漢字の出現状況」を参照。)

Ⅱ 中学校卒業段階で問題を持ちこした文字(音訓)についての読み書きの力等をみるための調査

中学生の漢字習得調査の結果、義務教育終了段階では、当用漢字について、未学習、未習得文字（音・訓）があり、習得上の問題点が残されているが、それが、その後の高次な高校教育、豊かな言語生活などを経た高校終了段階では、どの程度解決できるのか、卒業直前の高校生について調査し、高校生の漢字習得の到達度を推定しようとするもの。中学生の漢字習得に関する研究の追究的調査である。

調査問題 1	調査文字数	調査用紙
(1) 教育漢字の読み	165字 (182音訓)	2 枚
(2) 教育漢字の書き	170字	4 枚
(3) 教育漢字外当用漢字の読み	265字 (303音訓)	4 枚
(4) 教育漢字外当用漢字の書き	750字	15枚

#### 調査問題 2

- |                       |               |
|-----------------------|---------------|
| (1) かながき文章の漢字かなまじり文章化 | 2 枚 (作業指示文とも) |
| (2) " "               | 2 枚 ( " )     |

(進学時期を控え、調査時間が多くとれないのに、問題は量が多いので、被調査者<学級ごと>を2分して問題を分担、ひとりあたりの調査負担量を少なくするようにした。その際1人が、問題1または2の、ある問題のみに偏しないよう均衡を保ちながら、それぞれの問題を実施するように配慮した。)

所要時間 120分強 (ワークリミット方式)

#### 調査の実施校

中学3年生の集団調査地域に関連づけて、東京・大阪・愛知の各高校2校を調査実施校とした。

東京	都立目黒高等学校	校長	松隈 義勇 (国語主任)	江野沢 淑子)
"	" 杉並 "		堀井 清 (	大柴 武男)
大阪	市立東高等学校		岡崎 悌雄 (	若林 良江)
"	府立園芸 "		山崎 太郎 (	満谷 義泰)
愛知	県立豊橋東高等学校		渥美 政雄 (	磯貝 茂治)
愛知	県立国府 "		小田 都平 (	金子 政美)

各学校の選定、調査の実施にあたり、東京都教育庁指導主事 古矢弘

氏、大阪府教育委員会指導主事 市川速男氏、大阪市教育委員会指導主事 沢田輝栄氏、愛知県教育委員会指導主事 佐藤敬治氏にご協力を賜った。

各校、3学級分とし、進学組（理科系・文科系）、就職組等の配分を考えたが、学校によっては、一律にこうした配分を望めず、また、実業高校も加わるなど、かえって、種々な高校卒業生の漢字力の実態を知ることができそうである。

調査実施時期 昭和44年1月21日～2月8日

集計整理は次年度に行なう。

## E 今後の予定

以上が、43年度の研究作業の概要であるが、次年度の早い時期に、43年度に刊行し得なかった報告書「中学生の漢字習得に関する研究」を刊行すること、また、義務教育段階では問題を持ちこし、高等学校教育の段階に期待されている高校生の漢字力について、43年度末に実施した調査結果を参考の手始めにしながら、研究を進めていく予定である。

（声沢）

### 〔付〕 中学校の教科書における漢字の出現状況

#### 1 調査の目的

中学生が漢字を習得する要因も、小学生のばあいと基本的にことなるものではない。学校でならうほかに、家族におしえられたり、本やテレビをとおして自分でおぼえたりすることもあるにちがいない。また、町でみかける看板や標識、それに、したい人の名とか住所とかにつかわれている漢字をいつのまにかおぼえてしまうこともあるであろう。そのときに記憶できなくても、のちにまなんだおりに、そういった経験がその漢字の習得にやくだつこともあるかもしれない。中学生になれば、その行動範囲がひろがるので、漢字の習得過程もそれにつれて複雑になる。しかも、習得はひとつの要因によ

ってきまるといよりも、習得を可能にするいくつかの因子がたがいにかかわりあって作用していることがじっさいにはおおいであろう。その因子の組合せも、またその力関係も、ケースごとにことなるであろう。こういった外的な条件のほかに、それをうけとめる人間のがわの問題もある。内的な条件、たとえば、個人的な経験とか性質とか知能とかも、いろいろな度あいではたらくであろう。また、画数がおおいかすくないか、偏旁冠脚への分解が容易かどうか、類義の異字や形の酷似した別字などがおおいかどうか、あるいは、点があるか、つきぬけるか、はねるか、とめるかなどの字形のとりやすさの程度といった、漢字そのものがわの条件も、ときにはつよく、ときにはよわく、習得の難易にひびくであろう。習得を規定する条件には、以上の3つの面がかんがえられる。すなわち、ひとつは、漢字そのものがわの条件、ひとつは、人間のがわの条件、もうひとつは、漢字と人間との接触の条件である。

本調査は、中学生の漢字習得に関する調査および研究の一環として、習得状況の追跡調査の対象となった生徒たちが使用した教科書における漢字出現の状況をしらべ、読み書きテストの結果との関連をしめすことにより、その習得要因の考察にひとつの参考資料を提供しようとするものである。したがって、上にあげた習得を規定する条件の3つの面のうちの3番め、すなわち漢字と人間との接触の条件の一部に関係することとなる。

以上のように、この調査は、中学校の教科書における漢字使用状況の一般的な実態をおさえようとしたものではないし、また、各教科書における漢字提出の問題点を指摘することによってその改善をはかったものでもなく、あくまで漢字習得の要因のひとつをさぐるためのものなので、調査結果から中学教科書の漢字出現に関する一般的傾向を考えるさいには、次の諸点において適性をかき、資料価値のおちることを念頭におく必要がある。

- 1) 同一校の同一学年の生徒である被調査者がもちいた教科書にかぎったので、調査の対象となった教科書の種類がすくない
- 2) 被調査者の在学中にほとんどの教科において使用教科書の採用に変更



があったので、調査の対象となった教科書に資料としての系統性がな  
い

- 3) 教育漢字のうち、被調査者が小学校時代に習得できたとかんがえられる漢字については調査しなかったので、一般的には問題のある字種を対象からはずした危険がある

## Ⅱ 調査の資料

国語：『中等国語』1，2年用（三省堂・昭38）『中等国語＜新訂版＞』3年用  
（三省堂・昭41）

数学：『中学数学』＜数量編，図形編＞1，2年用（教育出版・昭39）『中学新教  
学』3年用（啓林館・昭41）

社会：『中学社会』1＜地理上，下＞，2＜歴史上，下＞年用（三省堂・昭39）  
『中学社会』3年用（日本書籍・昭41）

理科：『中学校理科』1，2年用（大日本図書・昭39）『新しい科学』3年用  
（東京書籍・昭41）

英語：‘NEW PRINCE READERS’ 1，2年用（開隆堂・昭38）  
‘THE JUNIOR CROWN ENGLISH COURSE’ 3年用  
（三省堂・昭42）

音楽：『中学音楽』1，2年用（教育芸術社・昭38）『中学生の音楽』3年用  
（音楽之友社・昭40）

美術：『中学校美術』1，2年用（学校図書・昭39）『美術』3年用（日本文教  
出版・昭41）

技術・家庭：『技術・家庭』＜男子用，女子用＞1，2年用（実教出版・昭39）  
『技術・家庭』＜男子用＞3年用（開隆堂・昭41）『技術・家庭』＜女子  
用＞3年用（学研書籍・昭41）

保健体育：『中学保健体育』1～3年用（大修館・昭39）

— 9教科 計32冊 —

## Ⅲ 調査の範囲

### (1) 調査の対象とした漢字の範囲

教育漢字のばあい、国語科においては次にかかげるもの以外をあつかい、

他教科においてはいっさいあつかわなかった。

①被調査者8人のうち7人以上がただしくかけ、音訓表にみとめられている全音訓を7人以上がただしくよめた漢字のいっさいの用例

②被調査者8人のうち7人以上がただしくかけた漢字の、音訓表にみとめられている音訓のうち、7人以上がただしくよめた字音や字訓の用例

教育漢字外当用漢字および表外字については、全教科の教科書を調査し、出現する全用例をあつかった。

## (2) 漢字の調査範囲

教育漢字のばあいは、国語教科書において、各漢字の全使用例をひろい、当該字の音訓ごとに分類し、各用例の学年別出現回数をしらべた。

教育漢字外当用漢字のばあい、国語科においては、各漢字および音訓表にみとめられた各音訓ごとの学年別出現回数をしらべ、他教科においては、用例ごとの教科別初出をおさえた。

表外字のばあいは、出現した各漢字について、出現した各音訓ごとに、教育漢字外当用漢字とおなじ項目をしらべた。

## (3) 教科書の調査範囲

調査目的が、教科書における漢字提出の実態をおさえるところではなく、漢字習得の要因を探索するところにあるので、被調査者の目にどういう形で映じたかをするために、調査範囲を本文の部分にかぎらず、Ⅱにかかげた各資料について、次をのぞくすべてとした。

- 1) 奥付（ただし、表紙・扉・裏表紙などは調査する）
- 2) 絵・写真の中（ただし、説明部分については調査する）
- 3) 当用漢字一覧表（これを調査範囲にいれると、ほとんどの当用漢字を機械的にふくむことになってしまう）
- 4) 漢字をかかげただけで語として使用していない部分
- 5) 漢文（ただし、書きだし文については調査する）

## Ⅳ 調査の細則<抄>

- (1) 読みを決定するさいの原則

- 1) 2種類以上の読みがおこなわれているばあいは、辞書に登録されている形を優先
- 2) 通常の辞書にも2種類以上の形が登録されているばあいは、当用漢字音訓表に反しない読みを優先
- 3) 上で区別できないばあいは、その資料における他の表記例および文脈・文体を参考にして決定
- 4) 上で判断のむずかしいばあいは、現代の一般社会において通例とおもわれるものを採択

(2) 誤用例の処理

- 1) 記載事項の内容の誤りは無視
- 2) 誤用の例をしめしたものは調査対象から除外
- 3) 単なる誤植、および原資料を忠実にしめすため誤用にもかかわらず原表記にしたがったものは、調査の対象とする

(3) 用例の所属する音訓の決定

- 1) 漢字に対応するかなの部分のちがう用例でも、音訓表で区別のないばあいは、同一の音訓としてあつかう
- 2) 漢字に対応するかなの部分のおなじ用例でも、音訓表で品詞などによる区別のあるばあいは、それぞれ別の音訓としてあつかう
- 3) 連濁・連声・音便など2字の連合などによって生ずる音変化のばあいは、原則として変化する前の形であつかう
- 4) 当用漢字のばあいは、音訓表にあげてある音訓、およびその許容範囲の変化とかがえられる用例、表外字のばあいは、『角川漢和辞典』の音訓索引および「人名・姓氏」にみられる読みを、それぞれのわくとし、それ以外の用例は特殊用法として別扱いにする

(4) 用例の単位

- 1) 用例は原則として語の単位でしめす
- 2) 語の認定は、『岩波国語辞典』の親見出しにたつもつともながい形とする

- 3) 活用のある語は終止形でしめす（ただし、2字以上の漢語に「する」のついたサ変動詞と形容動詞とは語幹の形でしめす）
- 4) 固有名詞も構成部分が独立できるばあいはぬきだす。
- (5) 固有名詞の判定
- 1) 地名・人名・作品名・流派名・国名・言語名は固有名詞扱いとする
  - 2) 品種類名・神仏の名・省や庁などの役所の名・政党などについては『研究社国語新辞典』で大文字表記のものを固有名詞扱いとする
  - 3) 時代名については、地名や年号からなるものを固有名詞扱いとする

#### V 調査の結果

以上の方針にもとづいて、被調査者が中学時代の3年間に使用した教科書における漢字の出現状況を調査し、漢字ごとに整理した結果を次のような一覧表にまとめた。

#### 〔見本〕 1 教育漢字

漢字番号 書(入)一(出)	漢字	音訓	読(入)一(出)	出現度数				用 例
				1年	2年	3年	計	
237 ⑧—⑧	戸	コ と	⑥—⑧ ⑧—⑧	3 /	0 /	3 /	6 /	戸外・戸籍 <small>コウベ</small> 神戸<固>（～市）
840 ①—⑥	欲	ヨク	⑦—⑧	2	4	9	15	欲望・欲求・欲（～・読書～・知識～）・強欲
		ほっす る	③—⑧	0	0	4	4	欲す・欲する

〈注〉 教育漢字外当用漢字と表外字の見本は次ページに掲載

一覧表からは、各漢字について、次の諸点をよみとることができる。

- ① 当用漢字の（書きテスト、各音訓についての読みテスト）の（入学時、卒業時）における成績
- ② （各音訓、各漢字）としての国語教科書における（学年別、全学年）の出現度数

[見本] 2 教育漢字外当用漢字

漢字番号 書①—⑥	漢字	音訓	読①—⑥	出現度数(国語)			教科別初出学年						出現 教科 数	用 例<注>(結合例) 教科名			
				1年	2年	3年	計	国 数	社 理	英 音	美 体	技・ 藝			家 教		
333 ④—⑥	姿	シ すがた	⑤—⑧ ⑥—⑧	0	2	4	6	2・1	2	0	0	3	2	2	1	5	姿勢(～・正常～ナド) ⑤ 容姿(後) ⑥ 容姿(後) ⑦ 容姿(後) ⑧ 容姿(後) ⑨ 容姿(後) ⑩ 容姿(後) ⑪ 容姿(後) ⑫ 容姿(後) ⑬ 容姿(後) ⑭ 容姿(後) ⑮ 容姿(後) ⑯ 容姿(後) ⑰ 容姿(後) ⑱ 容姿(後) ⑲ 容姿(後) ⑳ 容姿(後) ㉑ 容姿(後) ㉒ 容姿(後) ㉓ 容姿(後) ㉔ 容姿(後) ㉕ 容姿(後) ㉖ 容姿(後) ㉗ 容姿(後) ㉘ 容姿(後) ㉙ 容姿(後) ㉚ 容姿(後) ㉛ 容姿(後) ㉜ 容姿(後) ㉝ 容姿(後) ㉞ 容姿(後) ㉟ 容姿(後) ㊱ 容姿(後) ㊲ 容姿(後) ㊳ 容姿(後) ㊴ 容姿(後) ㊵ 容姿(後) ㊶ 容姿(後) ㊷ 容姿(後) ㊸ 容姿(後) ㊹ 容姿(後) ㊺ 容姿(後) ㊻ 容姿(後) ㊼ 容姿(後) ㊽ 容姿(後) ㊾ 容姿(後) ㊿ 容姿(後)
950 ④—⑥	麗	レイ うるわ しい	⑩—⑬ ④—⑧	0	0	11	11	3	3	0	3	0	0	0	0	2	壯麗(後) ⑤ 豊麗(後) ⑥ 麗しい(後) ⑦ 高麗(後) ⑧ 高麗(後) ⑨ 高麗(後) ⑩ 高麗(後) ⑪ 高麗(後) ⑫ 高麗(後) ⑬ 高麗(後) ⑭ 高麗(後) ⑮ 高麗(後) ⑯ 高麗(後) ⑰ 高麗(後) ⑱ 高麗(後) ⑲ 高麗(後) ⑳ 高麗(後) ㉑ 高麗(後) ㉒ 高麗(後) ㉓ 高麗(後) ㉔ 高麗(後) ㉕ 高麗(後) ㉖ 高麗(後) ㉗ 高麗(後) ㉘ 高麗(後) ㉙ 高麗(後) ㉚ 高麗(後) ㉛ 高麗(後) ㉜ 高麗(後) ㉝ 高麗(後) ㉞ 高麗(後) ㉟ 高麗(後) ㊱ 高麗(後) ㊲ 高麗(後) ㊳ 高麗(後) ㊴ 高麗(後) ㊵ 高麗(後) ㊶ 高麗(後) ㊷ 高麗(後) ㊸ 高麗(後) ㊹ 高麗(後) ㊺ 高麗(後) ㊻ 高麗(後) ㊼ 高麗(後) ㊽ 高麗(後) ㊾ 高麗(後) ㊿ 高麗(後)

[見本] 3 表 外 字

漢字番号	漢字	音訓	出現度数(国語)			教科別初出学年						出現 教科 数	用 例<注>(結合例) 教科名			
			1年	2年	3年	計	国 数	社 理	英 音	美 体	技・ 藝			家 教		
239	組	ジョウ なわ <字>	0	1	0	1	1	0	2	0	3	1	0	0	4	組文(～式土器・～時代・～文化ナド) ⑤ 組紐(後) ⑥ 組紐(後) ⑦ 組紐(後) ⑧ 組紐(後) ⑨ 組紐(後) ⑩ 組紐(後) ⑪ 組紐(後) ⑫ 組紐(後) ⑬ 組紐(後) ⑭ 組紐(後) ⑮ 組紐(後) ⑯ 組紐(後) ⑰ 組紐(後) ⑱ 組紐(後) ⑲ 組紐(後) ⑳ 組紐(後) ㉑ 組紐(後) ㉒ 組紐(後) ㉓ 組紐(後) ㉔ 組紐(後) ㉕ 組紐(後) ㉖ 組紐(後) ㉗ 組紐(後) ㉘ 組紐(後) ㉙ 組紐(後) ㉚ 組紐(後) ㉛ 組紐(後) ㉜ 組紐(後) ㉝ 組紐(後) ㉞ 組紐(後) ㉟ 組紐(後) ㊱ 組紐(後) ㊲ 組紐(後) ㊳ 組紐(後) ㊴ 組紐(後) ㊵ 組紐(後) ㊶ 組紐(後) ㊷ 組紐(後) ㊸ 組紐(後) ㊹ 組紐(後) ㊺ 組紐(後) ㊻ 組紐(後) ㊼ 組紐(後) ㊽ 組紐(後) ㊾ 組紐(後) ㊿ 組紐(後)
389	阪	ハン さか <字>	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	阪神<国> ⑤ 工業地帯・京～地方ナド) ⑥ 大阪<国> ⑦ 大阪<国> ⑧ 大阪<国> ⑨ 大阪<国> ⑩ 大阪<国> ⑪ 大阪<国> ⑫ 大阪<国> ⑬ 大阪<国> ⑭ 大阪<国> ⑮ 大阪<国> ⑯ 大阪<国> ⑰ 大阪<国> ⑱ 大阪<国> ⑲ 大阪<国> ⑳ 大阪<国> ㉑ 大阪<国> ㉒ 大阪<国> ㉓ 大阪<国> ㉔ 大阪<国> ㉕ 大阪<国> ㉖ 大阪<国> ㉗ 大阪<国> ㉘ 大阪<国> ㉙ 大阪<国> ㉚ 大阪<国> ㉛ 大阪<国> ㉜ 大阪<国> ㉝ 大阪<国> ㉞ 大阪<国> ㉟ 大阪<国> ㊱ 大阪<国> ㊲ 大阪<国> ㊳ 大阪<国> ㊴ 大阪<国> ㊵ 大阪<国> ㊶ 大阪<国> ㊷ 大阪<国> ㊸ 大阪<国> ㊹ 大阪<国> ㊺ 大阪<国> ㊻ 大阪<国> ㊼ 大阪<国> ㊽ 大阪<国> ㊾ 大阪<国> ㊿ 大阪<国>

- ③ (教育漢字外当用漢字, 表外字) の (各音訓, 各漢字) としての (全教科をとおして, 教科別) の初出学年
- ④ (教育漢字外当用漢字, 表外字) の (各音訓, 各漢字) としての出現教科数
- ⑤ 各漢字の (音訓ごと, 特殊用法として) の使用例, 各用例の (固有名詞としての用例, 他の構成要素との結合例, 出現教科)

## Ⅶ 一覧表の利用例

個々の漢字や音訓についての出現状況をしるには、一覧表の該当欄をみればよいが、さらにある操作をほどこすことにより、ある条件の漢字や音訓のグループをえたり、いくつかの項目にまたがるある状況なりその傾向なりをおさえたりすることもできる。そうしてえられた結果にまた別の操作をくわえれば二次的な別の情報がえられるわけであり、このような操作をかさねるにつれて、この表からひきだされる情報はそれだけ豊富になるはずである。

そのうち、漢字習得の要因に関連のありそうな面における、一次的な操作だけでえられる情報としては、次のようなものがかんがえられる。

### 1 初出に関する面

#### 1—1 学年別の新出 (漢字・字音・字訓) 数

#### 1—2 (教科・学年) 別の新出 (漢字・字音・字訓) 数

### ㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

[漢字]

学年 \ 教科	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	技術 家庭	
									男	女
1	366	102	318	81	37	77	61	94	128	154
2	264	23	290	198	68	49	68	163	44	50
3	174	53	122	106	96	109	51	68	128	98
計	804	178	730	385	201	235	180	325	300	302

〔字音〕

学年	教科								技術 家庭	
	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	男	女
1	258	75	267	51	19	46	33	74	107	131
2	236	17	265	176	34	26	47	146	38	47
3	206	45	131	117	70	75	40	65	101	83
計	700	137	663	344	123	147	120	285	246	261

〔字訓〕

学年	教科								技術 家庭	
	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	男	女
1	166	42	79	35	18	26	30	27	29	39
2	137	6	72	49	38	23	18	39	9	10
3	112	12	38	16	36	48	18	12	58	32
計	415	60	189	100	92	97	66	78	96	81

表外字のばあい

〔漢字〕

学年	教科								技術 家庭	
	国語	数学	社会	理科	英語	音楽	美術	体育	男	女
1	56	8	138	24	0	23	6	8	2	7
2	57	4	198	14	2	21	32	4	0	1
3	115	6	25	9	23	33	10	8	11	11
計	228	18	361	47	25	77	48	20	13	19

- 1—3 国語より先に他教科にあらわれた（漢字・字音・字訓）
- 2 出現量に関する面
- 2—1 国語にあらわれなかった（漢字・字音・字訓）

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕

亜 芋 姻 謁 宴 毆 翁 虞 乙 卸 佳 禍 寡 餓 悔 劾 該  
 嚇 渴 轄 喚 堪 款 憾 還 忌 棋 宜 虐 糾 窮 凶 恭 斤  
 謹 儉 吳 蒜 坑 恒 拘 侯 慌 絞 醇 鋼 拷 剛 酷 獄 墾  
 債 搾 擦 暫 嗣 詔 璽 疾 漆 赦 勺 尺 囚 臭 愁 叔 淑  
 爾 循 遊 緒 升 匠 祥 詔 獎 礁 剩 錠 釀 囑 辱 娠 紳  
 迅 帥 衰 睡 錘 畝 窈 旋 銑 阻 租 措 塑 喪 墮 胎 逮  
 諾 但 鍛 逐 嫡 衷 弔 兆 脹 朕 陳 坪 呈 通 艇 迭 斗  
 奴 悼 痘 騰 匿 豚 軟 尿 妊 寧 肺 陪 媒 賠 闕 畔 頰  
 泌 苗 扶 附 赴 賦 侮 墳 丙 柄 遍 邦 奔 耗 紋 匄 幽  
 庸 窯 醜 濫 痢 履 疏 陵 厘 隸 廉 賄

2-2 国語にあらわれた回数のおおい (漢字・字音・字訓)

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕

出現回数

40~59 偉 影 箇 丸 吉 泣 叫 狂 響 惠 傾 激 荒 刻 込  
 座 咲 紫 誌 晶 吹 井 窓 装 端 潮 突 背 片 棒  
 雄 優 与 腰 頰  
 60~79 越 箇 脚 源 旨 笑 盛 霜 渡 惱 拔 姫 浮 普 並  
 幕 忘 夢 覽 隣  
 80~99 御 好 若 寝  
 100~149 押 呼 降 姿 昔 舞  
 150~199 違 飾 彼  
 200~261 劇 段 郎

表外字のばあい

〔漢字〕

出現回数

5~9 葦 芥 涯 串 韓 几 襟 堀 溪 喧 彦 柴 牀 壤 辰



渴 楚 宋 槍 噪 塚 杜 琶 琵琶 蕪 俣 曆 弥 李 龍  
麟 呂 鹿

10～14 脇 之 奈 阪 蘭

15～19 岡 梓 蕉 濤 芭

20～24 威 伎 崎 蝥

25～29 なし

30～87 吾 萩 枕 亭 藤

### 3 出現間隔に関する面

#### 3-1 国語にあらわれた回数がどの学年でもおおい（漢字・字音・字訓）

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕

偉 押 割 簡 丸 脚 叫 響 傾 劇 御 好 刻 映 旨 姿 若  
笑 飾 寝 昔 装 端 段 途 渡 背 抜 浮 舞 並 片 暮 忘  
夢 雄 朗 郎

### 4 出現幅に関する面

#### 4-1 各（漢字・字音・字訓）のあらわれた教科の幅

〈注〉 例は次ページに掲載

#### 4-2 ほとんどの教科にあらわれなかった（漢字・字音・字訓）

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕 どの教科にもあらわれなかったもの：

芋 謁 殿 佳 寡 餓 悔 喚 堪 款 憾 忌 棋 糾 恭 椿 暫 嗣 諳 璽 囚 叔 淑 祥 鏡 囁 娠 紳  
窃 逐 嫡 弔 脹 朕 遙 艇 迭 悼 匿 畔 赴 奔 賄

「技術・家庭」〈女子用〉にあらわれただけのもの： 陳 妊

「技術・家庭」〈男子用〉にあらわれただけのもの： 絞

#### 4-3 いろいろな教科にあらわれた（漢字・字音・字訓）

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕 男子・女子のどちらにとっても8教科以上にあらわれたもの：

影 鉛 押 較 割 卷 簡 響 呼 互 好 刻 座 射 斜 振 井 段 頂 微 途 渡 濃 箱 般 並 壁 棒 密 離

4-1 の㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕

教科数	漢字数	教科数	漢字数	教科数	漢字数	教科数	漢字数
0	44	2・3	15	5・4	28	7	35
0・1	2	3・2	13	5	79	7・8	4
1・0	1	3	132	5・6	26	8・7	5
1	113	3・4	23	6・5	15	8	20
1・2	11	4・3	27	6	60	8・9	0
2・1	8	4	94	6・7	5	9・8	2
2	171	4・5	22	7・6	6	9	8

表外字のばあい

〔漢字〕 男子・女子のどちらにとっても5教科以上にあらわれたもの：

阿伊垣猿岡鶴崎杉須洞奈阪弥龍鎌

5 出現偏向に関する面

5-1 特殊用法としてしかあらわれなかった漢字

㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

翁（翁舞）謹（謹む）蒸（蒸）盾（盾）

貞（貞永・義貞）篤（実篤）矛（矛）

5-2 きまった語形でしかあらわれなかった漢字

5-3 固有名詞にしかあらわれなかった（漢字・字音・字訓）

6 出現形態に関する面

6-1 固有名詞以外にあらわれた表外字

7 出現状況と成績との平均的対比

〈注〉 以下にいう「成績」は、「漢字」のばあいは読みテストと書きテストの両方を、「字音」「字訓」のばあいは読みテストだけをさす。

7-1 国語に（あらわれた、あらわれない）（漢字・字音・字訓）の成績

の変化

- 7—2 国語にあらわれた回数（おおい，すくない）（漢字・字音・字訓）  
の成績の変化
- 7—3 国語にあらわれた回数が（どの学年でも，ある学年でだけ）おおい  
（漢字・字音・字訓）の成績の変化
- 7—4 初出が（国語，他教科）であった（漢字・字音・字訓）の成績の変  
化
- 7—5 （1，2，3）年初出の（漢字・字音・字訓）の成績の変化
- 7—6 （いろいろな教科にあらわれた，ほとんどの教科にあらわれなかつ  
た）（漢字・字音・字訓）の成績の変化
- 8 出現状況と成績との個別的対比  
〈注〉 入学時の成績がわるく，卒業時にはほとんどの生徒が正答をだしたばあいを「習得度がたかい」とし，卒業時になっても大部分の生徒が習得したとはみなせないばあいを「習得度がたかくない」とした。
- 8—1 国語にあらわれなくても習得度のたかい（漢字・字音・字訓）  
㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい  
〔漢字〕 亜呉兆軟尿管柄痲疏厘
- 8—2 国語にあらわれた回数がおおくても習得度のたかくない（漢字・字  
音・字訓）  
㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい  
〔漢字〕 違越押泣劇御降旨紫晶飾寝吹井昔装突惱並優与腰覽隣
- 8—3 ほとんどの教科にあらわれなくても習得度のたかい（漢字・字音・  
字訓）  
㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい  
〔漢字〕 怪呉恨胎愈奴丙凡痲厘
- 8—4 いろいろな教科にあらわれても習得度のたかくない（漢字・字音・  
字訓）  
㊦ 教育漢字外当用漢字のばあい

〔漢字〕

為 違 維 越 縁 押 隔 穫 割 換 寛 鑑 危 既 距 偶 擘  
穴 降 鎖 齋 射 充 縦 熟 傷 蒸 触 吹 垂 井 礎 装 致  
微 抵 塔 闘 突 粘 髮 般 範 微 伏 並 壁 浦 房 麻 誘  
優 与 裏 腕

〈注〉 以上の結果をみちびきだすてつづきや基準はそれぞれのばあいにおいてことなるので、ここではすべて省略した。くわしくはちかく刊行予定の報告書『中学生の漢字習得に関する研究』をみられたい。

(中村)

# 就学前児童の言語能力に関する全国調査

## A 目的・意義

幼児、児童、生徒が言語、文字をどのように習得し、どのように使用するか、またその要因はなにか等を明らかにする言語発達の研究は、国語教育、とくに、その教育計画や指導法の確立、改善のために欠くことのできぬ基礎的な仕事として重視されなければならない。本調査は3年計画で就学前児童の言語能力の習得の過程および条件を全国的規模で明らかにしようとするものであり、本年度はその第2年次として、就学前児童の話し力調査を行なった。

## B 担当者

本調査に関する計画立案、実施は、国語教育研究室の村石昭三、天野清の2名が担当し、福田昭子がこの作業を助けた。さらに調査の諸段階でテスト作成専門員（5名）、準備および前調査幼稚園（3園）、本調査幼稚園（30園）、調査員（30名）、実験協力園（2園）の協力を得た。

## C これまでの経過

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」は昭和42年度よりはじまる。すなわち、第1年次は「就学前児童の文字力調査」として、次の調査を主に行なった。

〔調査1〕読み書き水準調査——就学前児童の文字力の全国的水準を明らかにするために、平がなの清音、撥音、濁音、半濁音の読み書きテスト、拗音、長音、拗長音、促音および助詞「は」「へ」の読みテストを、東京、東北、近畿の3地方の全幼稚園から層別抽出した122幼稚園、2,235名（4・5歳児クラス）について行なった。また、幼稚園、家庭に対してアンケート調

査を行なった。

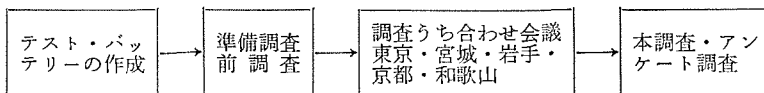
〔調査2〕特定幼児の文字調査——就学前児童がどの程度の範囲の文字をどれだけ読み書きできるかを、平かな、片かな、漢字、アルファベット、数字にわたり、全国の特定18幼稚園の幼児72名（4・5歳児クラス）について追跡調査した。

## D 本年度の作業

〔調査概要〕就学前児童の語い力調査「2年計画 第1年次」

東京、東北（宮城・岩手）、近畿（京都、和歌山）の各地方の幼稚園から抽出した延べ36園918名の就学前児童（4・5歳児クラス）を対象に基本的な語の理解水準をテスト法によって明らかにした。いっぽう、被調査園、家庭を対象にしたアンケート調査から、就学前児童の言語生活に関する実態調査を行なった。

〔調査手順〕



〔テスト・バッテリー〕

本調査のテスト・バッテリーは次の4種から構成した。調査地区と被調査者の人数配分は次の通りである。

地区	テスト			
	A 範疇化	B 性状語	C 時間・空間語	D 動詞分化
東京	78	74	80	76
東北	宮城	75	74	
	岩手	76	76	
近畿	京都		79	76
	和歌山		77	77

## A 範疇化テスト

上位概念の形成過程を次の各テストによって調べた。

(1) 語の理解テスト 絵カード(36枚)を利用し、その絵があらわす物の名称をいわせ、単語の理解を調べた。

(2) 自由分類・同類選択テスト 絵カード(27枚)を利用し、同類のもの(グループ)を自由になるべく多くつくらせ、それが同グループである理由と、そのグループの名称をたずねた。

(3) カテゴリーの命名テスト あらかじめ範疇化した絵図(20図)を見せて、そのグループの名称(上位語)をたずねた。

(4) 絵カードの選択テスト 絵カード(27枚)——(2)に同じ——を利用し、カテゴリーの名称を与えて、それに含まれるカードを選択させた。

上記の各テストに含まれる上位語、下位語は次の通りである。

上位語——花、人(人間)、野菜、鳥、自動車、道具、たべもの、乗り物、植物、動物、生物、魚、楽器、動物(四つ足)、虫(昆虫)、家、のみもの、果物、建物、電気製品、計20語

下位語——ばら、ひまわり、チューリップ、白菜、きゅうり、カボチャ、松、りんご、パン、運転手、お百姓さん、赤ん坊、すずめ、つばめ、あひる、象、鯉、蝶、バス、消防車、トラック、ヨット、飛行機、電車、じょうろ、包丁、シャベル、金魚、どじょう、らっぱ、木琴、バイオリン、うさぎ、猿、とんぼ、かぶと虫、家(A)、家(B)、家(C)、牛乳、ジュース、コーヒー、バナナ、いちご、東京タワー、橋、テレビ、扇風機、冷蔵庫、計49語

## B 性状語テスト

性状語のうち、視知覚の可能な対象について、その大きさ、高さ等を比較形容する13対26語(句を含む)を選んだ。

1. 大きい、小さい
2. 多い、少ない
3. 太い、細い
4. 濃い、うすい
5. 厚い、うすい
6. 広い、狭い
7. 高い、低い
8. 長い、短い
9. 深い、浅い
10. 高い、安い
11. 暑い、寒い

12. 最も大きい, 最も小さい 13. いちばん大きい, いちばん小さい  
(注) 10, 11はそれぞれ7および5の異なる文脈での対関係をもつ語として選んだ。

また, 12, 13は最上級をあらわす句形式としてとりあげた。

(1) 単語の系テスト——性状語を関連した単語(句)の系(対)の中に位置づけて理解しているかを調べた。

(2) 単語・事物の系テスト——性状語をそれぞれが指示する事物と結びつけて理解しているかを, 発語, 誘導発語, 認知の各段階に分け, 絵カードを使って調べた。

(3) パラメータの分離テスト——ホース, 手帳, リボン, ブロック・ビルの4材料を使い, 長さ, 太さ, 厚さ, 大きさ, 広さ, 高さの各パラメータが分離できるかを調べた。

(4) 系列化テスト——6種の絵カード(円, コップ, 池, りんご, 犬, 道)各5枚続きを使い, 大小, 多少, 広狭の順序に配列させ, 系列化ができるかを調べた。

### C 時間・空間語テスト

時間, 空間語のうち, 幼児の生活のなかで多く使用され, しかも時間, 空間語の系をつくるための基本となる単語, 38語を選んだ。

1. 前, 後(まえ, うしろ/まえ, あと)——先, 後(さき, あと), 前, 過(まえ, すぎ)
2. 上, 下(うえ, した)
3. たて, よこ, ななめ
4. 外, 中(そと, なか)
5. 左, 右(ひだり, みぎ)
6. 朝, 昼, 夜(あさ, ひる, よる)——朝, 晩(あさ, ばん) 昼, 夜(ひる, よる)
7. 日, 月, 火, 水, 木, 金, 土<曜日>
8. 春, 夏, 秋, 冬<季節>
9. 一昨日, 昨日, 今日, 明日, 明後日
10. 一昨年, 去年, 今年, 来年, 再来年
11. 今朝, 昨夜, 今夜

(注) 11は6および9の単語の複合によって成立した系列のものであり, 後掲(4)時間判断テストの中で扱った。

(1) 単語の系テスト——時間, 空間語を関連した単語の系(対, サークル, シリーズ)の中に位置づけて理解しているかを調べた。



(2) 単語・事物の系テスト——時間、空間語を、それぞれが指示する事物と結びつけて理解しているかを、発語、誘導発語、認知の各水準で絵カードを使って調べた。

(3) 位置変換（前後）テスト——2台の自動車（玩具）の位置変換による前後関係の理解を調べた。

(4) 時間判断テスト——特定の時間語（今朝、昨夜、今夜）について、相互の時間的前後関係が理解されているかを調べた。

#### D 動詞分化テスト

就学前児童が動詞をどの程度に使い分けしているかを通して、動詞を習得していく過程を明らかにした。

(1) 自動詞と他動詞の使い分けのテスト——1. 飛ぶ、飛ばす 2. まわる、まわす 3. ころがる、ころがす 4. ぶらさがる、ぶらさげる 5. われる、わる

(2) 楽器に関連している動詞の使い分けのテスト——吹く、たたく、ひく、演奏する（鳴らす）

(3) 生物、無生物の存在をあらわす動詞「ある」「いる」の使い分けのテスト

(4) 「切る」ことに関連した動詞の使い分けのテスト——1. 割る、切る 2. 切る、破く 3. 刈る、むしる

(5) 「作る」ことに関連した動詞の使い分けのテスト——1.（折紙を）折る 2.（家を）たてる 3.（セーターを）編む 4.（セーターを）つくる

(6) 直接対象（目的）〈特に「を」格〉と間接対象（目的）〈特に「に」格〉を支配する動詞の習得の程度とその使い分けのテスト——1.「とりつけ」動詞 ぶらさげる つなぐ はる はめる かける つなげる 2. 授与動詞 やる あげる くれる かす 教える あずける もらう かりる 習う あずかる

上記の各テストは、図版と積木を用いて、図版の絵にあらわされている内容を絵の下に書かれているマス目と絵であらわされている文の語構造を示す

構造モデルにそって、ひとつひとつの語を固定させながら、一定の型の文で表現させ、その中で当該の動詞を調べた。

〔テスト・バッテリーの作成分担〕

テスト・バッテリーは次の専門員の協力を得て作成した。各テストの責任分担は次の通りである。

- A 範疇化テスト 天野 清, 〔専門員〕阿部千春(東京大学 大学院)
- B 性状語テスト 村石昭三, 〔専門員〕大日方重利(東京教育大学 大学院)
- C 時間・空間語テスト 村石昭三, 〔専門員〕加藤綾子, 大滝ミドリ(東京家政大学助手)
- D 動詞分化テスト 天野 清, 〔専門員〕小熊 均(都留文科大学助教授)

〔被調査園〕

園名	住 所
(東京地区 6 園)	
亀戸幼稚園	東京都江東区亀戸町 4-17-3
道灌山幼稚園	〃 荒川区西日暮里 4-7-15
高千穂幼稚園	〃 杉並区大宮町 2-19-1
翼蔭幼稚園	〃 北多摩郡田無市向台町 2-5-1
小川幼稚園	〃 千代田区神田小川町 3-6
まきば幼稚園	〃 板橋区徳丸 2-9-7
(宮城地区 6 園)	
お人形社幼稚園	仙台市北五番丁 50
東岡幼稚園	〃 原町南目字町 67
聖和幼稚園	〃 木ノ下 21-5
仲よし幼稚園	〃 榴ヶ岡 21
小さき花幼稚園	〃 疊屋丁 31
東仙台幼稚園	〃 燕沢字苗代東 30-1
(岩手地区 6 園)	

わかば幼稚園	岩手県岩手郡平石町源太堂
おさなご幼稚園	〃 上閉伊郡大槌町桜木町 2—24
あづま幼稚園	〃 紫波郡紫波町土館字内川126— 1
清心幼稚園	〃 東磐井郡千厩町千厩字浦51
金ヶ崎聖母幼稚園	〃 胆沢郡金ヶ崎町表小路 6
摺沢幼稚園	〃 東磐井郡大東町摺沢字観音堂86

(京都地区 6 園)

京極幼稚園	京都市上京区塔ノ段藪ノ下町
明倫幼稚園	〃 中京区室町通錦上ル
待賢幼稚園	〃 上京区猪熊通丸太町下ル
伏見板橋幼稚園	〃 伏見区下板橋町610
慧日幼稚園	〃 東山区本町15丁目
円山幼稚園	〃 〃 高台寺北門通下河原東入鷺尾町524

(和歌山地区 6 園)

勝浦幼稚園	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町勝浦342
初島幼稚園	〃 有田市初島町浜1769— 1
湯浅幼稚園	〃 有田郡湯浅町大字湯浅785
高野山幼稚園	〃 伊都郡高野町高野山356
愛の光幼稚園	〃 那賀郡粉河町石町
下津幼稚園	〃 海草郡下津町大字下津477

〔調査員〕

(東京地区)

大日方重利 (東教大 大学院生)	加藤 綾子 (東京家政大 助手)
阿部 千春 (東京大 大学院生)	大滝 ミドリ (東京家政大 助手)
小熊 均 (都留文科大 助教授)	江川 洋子

(宮城地区)

加藤 正信 (東北大 助教授)	佐藤 淑子 (東北大 大学院生)
加藤 貞子	玉川 公代 (東北大 大学院生)
木村 進 (東北大 大学院生)	

(岩手地区)

坂口 忠（岩手県教育センター所員） 川村 善衛（岩手大 専攻科学生）  
大沢 博（岩手大 助教授） 石川 悌司（岩手大 専攻科学生）  
牧野 誠一（岩手大 学生） 倉島 敬治（岩手大 助手）  
斎藤 義憲（岩手大 専攻科学生）

（東京地区）（京都地区）

長田 久男（京都市教研 所員） 森下 正康（京都大 大学院生）  
井上 福造（京都市教研 所員） 小林 保太（京都大 大学院生）  
堀内 太郎（京都市教研 所員） 中嶋 順子（京都大 大学院生）  
山田 典男（京都市教研 所員）

（和歌山地区）

杉原 治（和歌山県教研修センター所員） 笹井 佳子（和歌山大 学生）  
関 岫一（和歌山大 助教授） 田中 隆司（和歌山大 学生）  
島 佐江子（和歌山大 学生）

〔調査経過〕

- 5月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための語いカテスト作成専門  
員会議を開いた。
- 6月・語いカテスト試案（A 範疇化テスト，B 性状語テスト）を完成した。
- 7月・語いカテスト試案による準備調査を東京・王子保育園，川口・舟戸幼稚園で  
実施した。
  - ・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための被調査園を18幼稚園に  
委嘱した。
- 8月・語いカテスト試案（C 時間・空間語テスト D 動詞分化テスト）による  
準備調査を東京・王子保育園で実施した。
- 9月・語いカテスト第二次試案（A 範疇化テスト）による準備調査を東京・王子  
保育園で実施した。
- 10月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための被調査園を12幼稚園に  
委嘱した。
  - ・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための調査員を30名に委嘱し  
た。
  - ・語いカテスト（A 範疇化テスト，B 性状語テスト）の前調査を栃木県大

田原市・ふたば幼稚園，川口・舟戸幼稚園で実施した。

11月・語い力テスト（A 範疇化テスト，B 性状語テスト）のための諸調査票を完成した。

- ・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための，A・Bテストの実施打ち合わせ会議（東北・東京地方）を調査員，幼稚園代表者と次の3会場で行った。

（宮城地区）仙台・お人形社幼稚園 （岩手地区）雫石町・わかば幼稚園

（東京地区）東京・道灌山幼稚園

- ・東京，東北地方で「就学前児童の言語能力に関する全国調査」を行った。調査期間は11月中旬～12月中旬

12月・語い力テスト（C 時間・空間語テスト，D 動詞分化テスト）の前調査を東京・保善寺幼稚園，川口・舟戸幼稚園で実施した。

1月・語い力テスト（C 時間・空間語テスト，D 動詞分化テスト）のための諸調査票を完成した。

- ・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための，C・Dテストの実施打ち合わせ会議（近畿・東京地方）を調査員，幼稚園代表者と次の3会場で行った。（京都地区）京都・明倫幼稚園（和歌山・地区）湯浅町・湯浅幼稚園（東京地区）東京・高千穂幼稚園

- ・東京，近畿地方で「就学前児童の言語能力に関する全国調査」を行った。調査期間は1月下旬～2月下旬

2月・被調査園30園，被調査者家庭916家庭に対してアンケート調査を行った。

3月・特定語に関する実験調査を国立国語研究所で行なった。被験者は東京・帝京幼稚園児。

## E 今後の予定

語い力テストならびにアンケート調査の集計は昭和44年度に行なう。また，44年度は「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の最終年次として，「就学前児童の語い・コミュニケーション能力調査」を行なう予定である。（村石）

# 言語の表現機能と伝達効果の研究

## A 目的・意義

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連において、とらえようとするものであるが、表現機能や伝達効果と言語の法則性との関連する事項のうち、まず、つぎのⅠとⅡのふたつのテーマをとりあげた。

Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究……場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点からしらべ、あわせて、場面の分析および表現の分析をおこなうことを目的とする。場面が表現に影響するもののうち、現在は、「主語の有無と場面の関係」をしらべるための研究をすすめている。

Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究……幼児のコミュニケーション機能の発達は、言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化のなかに、さまざまな形であらわれる。言語の表現機能と伝達効果を、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

## B 担当者

Ⅰは高橋太郎が担当し、Ⅱは、主として大久保愛が担当し、一部（動詞の形態および名詞の格）を高橋太郎がうけもった。また、Ⅰ、Ⅱを通じて、屋久茂子（43. 5. 31 退職）、鈴木美都代（43. 6. 1 近代語研究室から配置換え）が作業をたすけた。

## C これまでの経過

Ⅰ 言語表現における場面の効果の研究

主語の有無を場面との関係において問題にするばあい、まず、文における主語の役割から問題にしてかかからなければならない。なぜなら、ある主語の省略が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要とすることがわかっていなければならないし、また、ある主語の存在が場面の影響であるというためには、その本来の文型では主語を必要としないことがあきらかであればならないからである。そのために、まず「文における主語の役割」をあきらかにすることを目的として、「主語と述語の関係」についての分析をすすめてきた。

この分析のために、種類も豊富で大量の資料を得やすい、文章にあらわれた使用例をデータとしてつかうことにし、文庫本、全集などを材料として、カード化してきた。42年度までに、話しことば研究室および書きことば研究室と共同で、49の文学作品および14の論文ないし評論・解説文からのべ約50万枚（ことなり約1万8千枚）のカードを採集した。

## Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究

幼児のばあい、言語行動の能力は、言語使用能力ときわめて密接な関係をもっているので、幼児の使用する言語の分析からはじめることとし、まず幼児期における一応の到達点（乳児期よりはじまる言語獲得過程のいちおうの到達点）として、4～6才児の使用する言語の実態を分析することからはじめた。伝達活動の言語的な単位は、（幼児のばあい、しばしば、未完成文のなかに伝達の単位を見いだすことができるが）陳述の完成する文であるとされているので、文の構文論的な分析を主として、その構成要素である単語の形態論的な分析をこれにくわえて、研究をつづけてきた。これまでに、4～6才児の文型の概観、連体修飾法、補足文、動詞の形態などについて分析した。

幼児の言語を具体的に分析するためには、大量の資料を必要とするので、幼児の言語を録音し、それを文字化してカードにする方式をとった。42年度までに、年長児115名、年中児46名、計161名についての録音を文字化して、のべ約16万枚（ことなり約3千枚）のカードと、それを製本した、3種の

「ことばカード集」とを作成した。

## D 本年度の作業

### I 言語表現における場面の効果の研究

#### 1) 分析

本年度は、「主語の形式」と「述語の形式」を並行して分析しはじめた。一般に「主語」「述語」といわれているものを、分類し考察するというものである。たとえば、「述語の形式」のなかでは、2単語以上からなる述語の種類をまとめているが、そこには、「僕は ぐっと 詰まってしまった。」（徳富「思出の記」217）のような、形態論的な段階で二単語になっているもの、「それに 私は この 体です。」（徳田「あらくれ」206）のような、具体化するカザリをもった名詞述語、「私は、空おそろしい 気が いたします。」（倉田「出家とその弟子」184）のような、慣用句からなる述語など、さまざまなものがみられる。

#### 2) 用例カードの整理

今まで当研究室および話しことば研究室・書きことば研究室で使用した残りのカードを一箇所にあつめる作業の一部をおこなった。

### II 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究

#### 1) 補充資料の収集とカード化

##### 1.1 年中児の資料の補充

42年度までに採集した年中児（4：7～5：6）の資料は、年長児のそれに比して少なかったので、5月から6月にかけて、これを補充した。採集した園、幼児数は、つぎのとおりである。

神谷保育園 東京都北区神谷町2-36 男17 女14 計31名

小川幼稚園 東京都千代田区神田小川町3-6 男31 女13 計44名

この資料は、文字化して、3月、カードおよびカード集にした。カード枚数は、のべ約10万枚（ことなり約1万3千枚）である。

##### 1.2 年少児の資料採集



年少児（3：5～4：7）の資料を、年中児とおなじ2園で9月に採集した。

神谷保育園 男13 女9 計22名

小川幼稚園 男10 女6 計16名

なお、このうち2名ほどは、まったく話さず、採集できなかった。

### 1.3 自由な場面での資料採集

これまで採集した資料は、採集者との対話の記録であった。この方式は、一定のことがらについて話させることができ、また、かなり複雑なことがらを意識してのべるようなばあいの、きちんとした長い文をみちびきだすことに有利であったが、話題が限定され、また文のさまざまな陳述形式をうみだすことが困難であり、さらに、緊張のために話せない子どももあらわれるので、このほかに、自由な場面での幼児の発話の採集をこころみた。

これは、母親の協力を得て、しぜんなばめんでの幼児のことばを録音したものである。S児（3才女）、N児（4才女）、M児（5才児）を対象としたが、きょうだい・友だちなどのことばもはいつているので、3児よりはばのひろい年齢・性別構成を得ることができた。各児とも約7時間分で、今年度に、これを文字化した。

#### 2) 分析

今年度は、つぎの分析をおこなった。

- a) 文末形式の種類
- b) 名詞の格の使い方

## E 今後の予定

Iについては、「主語と述語の関係」をまとめる方向で分析をすすめる。  
IIについては、昨年度採集した録音資料をカード化するとともに、「4～6才児の文の構造」をまとめる方向で分析をすすめる。

(高橋)

# 明治時代語の研究

——明治初期における漢語の研究——

## A 目的・意義

近代語研究室は、国語の歴史的発達に関する調査研究を行なう部門に属し、近代語すなわち室町時代から明治・大正時代に至る各時代の言語の実態と、各時代を貫く歴史的変遷の要因とを明らかにし、現在の国語問題の解決に役立つ直接間接の資料を得ることを目的としている。

## B 担当者

飛田良文・松井利彦が共同して作業にあたり、牧野正子がこれを助けた。

## C これまでの作業経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行なってきた。その成果については、そのつど年報または報告書に発表されている。（『年報』7～19、および『明治初期の新聞の用語—報告15』参照）。

## D 本年度の作業

明治初期の漢語研究のため、次の作業を行なった。

- (1) 漢語に関する著書・論文目録の作成
- (2) 『花柳春話』のカード採集と分析
- (3) 近代語の文献資料の調査

その成果は、次の通りである。

- (1) 漢語に関する著書・論文目録の作成

本年度は、

「国語国文学論文総目録」斎藤清衛 昭和29年 至文堂、

「国語年鑑」(昭和29年版～43年版) 国立国語研究所 秀英出版

「近代語研究文献目録」(江戸時代) 近代語研究 第一集所収 福島邦道  
武蔵野書院

「近代語研究文献目録」(明治以後) 近代語研究 第一集所収 古田東朔  
武蔵野書院

「国語学(1—64号)論文記事目録」斎藤義七郎 昭和41年,

「国語学論集(20—38年)収録予定論文リスト第一草案」論説資料保存会昭  
和44年

「国語と国文学(1—500号)分類総目次」

「国語国文の研究・国語国文総目録索引」

「言語生活1号—200号総目録」筑摩書房

などから、漢語に係のある論文、著書名を抜き出し、「漢語研究に関する  
著書論文目録草稿(1)」を作成した。

## (2) 『花柳春話』のカード採集と分析

a) 『欧州奇事花柳春話』(丹羽純一郎訳・明治11～12刊 初編～附録 5冊)  
のカード採集を完了した。

『通俗花柳春話』(丹羽純一郎訳・明治17刊 初編～四編 4冊)も、初編  
のカード採集を完了した。

b) そこで、漢文直訳体の『欧州奇事花柳春話』の初編と、和文体で馬琴調  
といわれる『通俗花柳春話』のそれにあたる部分とを比較し、文体の異な  
る両者にどのような関係がみられるか、分析してみた。その結果は、以下  
の通りである。

① 調査単位は、文節であるが、漢語については、次のように扱った。

1) 並立語は一単位とする。(和語・外来語も同じ)

(例) 真善美, 花鳥風月, 唯々諾々, 文学技芸, 一小屋一美屋

2) 連体修飾語+被修飾語は一単位とする。したがって、連体詞は認め  
ない。

(例) ○○式○○, ○○的○○, 普通学士, 人寰交際

- 3) 「漢語+漢語」+の+体言の関係で、「漢語+漢語」が、主述の関係、連用修飾格+被修飾格の関係にあるものは一単位とする。  
 (例) 風日美妍ノ好時節, 一笑傾国ノ風姿,
- 4) 「漢語+数詞」の関係で連体修飾格+被修飾格の関係にあるものは一単位とする。  
 (例) 午後五時, 短歌一篇
- 5) 人名の「姓」と「名」は切らない。
- ② 語種別・品詞別にみた『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の用語を、延べ語数と異なり語数で比較すると、次の通りである。

(1) 用語の品詞別・語種別一覧表

品詞	書名	語種		外国語	漢外・和外混種語	和漢混種語	計
		漢語	和語				
		延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)
名詞	欧州奇事	2,567 (1,351)	1,581(181)	421 (44)	25 (13)	15 (10)	4,609 (1,599)
	通俗	937 (490)	3,602(826)	403 (41)	28 (15)	38 (29)	5,008 (1,401)
動詞	欧州奇事	—	2,162(389)	—	—	623 (333)	2,785(722)
	通俗	—	2,867(893)	—	—	142 (83)	3,009(976)
形容詞	欧州奇事	—	206 (41)	—	—	—	206 (41)
	通俗	—	497 (131)	—	—	—	497 (131)
形容動詞	欧州奇事	—	89 (18)	—	—	186 (151)	275 (169)
	通俗	—	111 (44)	—	—	32 (23)	143 (67)
副詞	欧州奇事	82 (38)	1,007(106)	—	—	49 (13)	1,138(157)
	通俗	26 (9)	1,064(225)	—	—	11 (7)	1,101(241)
連接・感	欧州奇事	—	381 (24)	—	—	—	381 (24)
	通俗	—	379 (49)	—	—	—	379 (49)
計	欧州奇事	2,649 (1,389)	5,426(759)	421 (44)	25 (13)	873 (507)	9,394 (2,712)
	通俗	963 (499)	8,520 (2,168)	403 (41)	28 (15)	223 (142)	10,137 (2,865)

(2) 漢語の品詞別・字数別一覧表

語構成	品詞 書名	名詞		副詞		計	
		延べ	(異なり)	延べ	(異なり)	延べ	(異なり)
一字漢語	欧州奇事	816	(176)	—		816	(176)
	通 俗	307	(88)	—		307	(88)
二字漢語	欧州奇事	1,577	(1,047)	81	(37)	1,658	(1,084)
	通 俗	561	(345)	26	(9)	587	(354)
三字漢語	欧州奇事	82	(54)	1	(1)	83	(55)
	通 俗	38	(30)	—		38	(30)
四字漢語	欧州奇事	84	(67)	—		84	(67)
	通 俗	27	(23)	—		27	(23)
五字漢語	欧州奇事	2	(2)	—		2	(2)
	通 俗	—		—		—	
六字漢語	欧州奇事	4	(4)	—		4	(4)
	通 俗	3	(3)	—		3	(3)
八字漢語	欧州奇事	1	(1)	—		1	(1)
	通 俗	—		—		—	
九字漢語	欧州奇事	1	(1)	—		1	(1)
	通 俗	1	(1)	—		1	(1)
計	欧州奇事	2,567	(1,352)	82	(38)	2,649	(1,390)
	通 俗	937	(490)	26	(9)	963	(499)

(1), (2), (3)の表から、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』に使用されている漢語の計量的な相違は明らかである。たとえば、延べ語数で漢語の占める率は前者で約28パーセント、後者で約10パーセントである。また、異なり語数では、漢語の占める率は前者で約51パーセント、後者で約17パーセントである。これらの差が両書に用いられている漢語の質とどのようなかわりをもつか、今後の分析の手がかりとしたい。

(3) 和・漢混種語の品詞別一覧表 (漢語サ変を含む)

語構成	品詞		名詞	動詞	形容動詞	副詞	計
	書名	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)	延べ(異なり)
一字漢語 と和語	欧州奇事	11 (6)	331 (116)	42 (26)	41 (5)	425 (153)	
	通 俗	30 (23)	100 (47)	9 (4)	6 (2)	145 (76)	
二字漢語 と和語	欧州奇事	1 (1)	279 (206)	140 (121)	6 (6)	426 (334)	
	通 俗	7 (5)	40 (34)	23 (19)	5 (5)	75 (63)	
三字漢語 と和語	欧州奇事	3 (3)	7 (5)	2 (2)	2 (2)	14 (12)	
	通 俗	1 (1)	—	—	—	1 (1)	
四字漢語 と和語	欧州奇事	—	4 (4)	2 (2)	—	6 (6)	
	通 俗	—	2 (2)	—	—	2 (2)	
五字以上の漢語と和語	欧州奇事	—	—	—	—	—	
	通 俗	—	—	—	—	—	
計	欧州奇事	15 (10)	621 (331)	186 (151)	49 (13)	871 (505)	
	通 俗	38 (29)	142 (83)	32 (23)	11 (7)	223 (142)	

③ 『欧州奇事花柳春話』の四字漢語と、それに対応する『通俗花柳春話』の表現

漢文直訳体の『欧州奇事花柳春話』は四字漢語が多いが、これらは、和文体の『通俗花柳春話』ではどうなっているか。同じか、違うか、比較してみた。その結果、次の対応の型がみられた。なお、四字漢語とは、調査単位で認めたものをさす。そして、「二字+二字」の関係にあるものに限った。並立の関係、主述の関係、修飾の関係は、「二字+二字」の関係をし、< >内は、その漢語の機能を示す。また(a)(b)(c)などは対応の型を示し、たとえば、(a)漢語—和語 とあれば、左は『欧州奇事花柳春話』、右は『通俗花柳春話』を示す。

並立の関係 (1) <体言+体言>

[1] 『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に付属語がついた場合

(a) 漢語——漢語（同語）

{ 文学技藝ニ踞ナリト雖也（欧 85べ11）  
文学技藝に踞けれども（通 101べ9）

(b) 漢語——漢語（別語）

{ 必ス上帝ノ愛庇保護ヲ受ン<sub>レ</sub>疑フヘカラサルヲ以テセリ（欧 45べ2）  
必ず上帝の保護をうけ身を終るまで安かるべしと（通 58べ1）

{ 能ク事物ノ是非得失ヲ辨解スルヲ得ン（欧 52べ11）  
物の是非を辨知得べし（通 62べ7）

{ 詩文劇詞ヲ善クシ名歐洲ニ顯ハル（欧 39べ5）  
詩文章を善し其名歐洲に顯る（通 50べ5）

{ 高閣層樓ハ稍々傾ントスレ也（欧 67べ5）  
高樓傑閣を併べ（通 77べ10）

(c) 漢語——和語

{ 正邪善惡ハ人性ノ自然ニ慣知スル所（欧 30べ8）  
世の善惡ハ自から人たる性の知所なれば（通 40べ10）

{ 夜々強盜隣地ニ入テ家産什物ヲ掠奪シ（欧 71べ10）  
毎夜此邊に強盜掠奪が徘徊して財産を奪ふのみならず（通 82べ9）

{ 獨リ皇天上帝ノ鑒スルアリ（欧 55べ6）  
皇天上帝ならで他に知者なし（通 64べ12）

{ 又問フテ曰ク習字讀書ヲ学フヤ（欧 30べ4）  
卿ハ習字讀書を学しことあるや（通 40べ4）

(d) 漢語——和語＋の＋和語

{ 唱歌管絃ヲ教ユルノミナラス（欧 48べ7）  
教所ハ管絃の業のみならず（通 60べ1）

{ 日夜ニ習字讀書ヲ勉強スレト (欧 37べ6)  
 ひごと ごとと とみ か き みち まなべ  
 毎日毎夜に讀書習字の道を学ど (通 48べ10)

(e) 漢語——その他 (文)

{ マルツラバースハ貧富貴賤ヲ論セス (欧 38べ12)  
 とめ まづしひ たふとき いでしぎ けがめ た  
 富るも貧も貴も又賤も差別を為さで (通 49べ12)

{ 瓶酒烟草モ亦備フ (欧 81べ12)  
 さけ たばこ そなへ  
 酒もあり烟草も備おかせたり (通 97べ10)

{ 君ノ幸福安全ヲ祈リ (欧 55べ7)  
 君の久後幸福をしるや知ずやいさゞ川堰れて中ハ絶るとも下行水のかよひ  
 ち かほ こころ まこと あまき いた  
 路ハ變らぬ心の誠のみ朝な夕なにおん身のうへ恙もあらず世に出し富榮  
 させ給はせと外より祈奉らんと (通 65べ2～4)

(f) 漢語——なし

- ・天地萬像ヲ以テ惡毒ヲ産スルノ物質トナシ (欧 85べ1)
- ・讀書ノ間ニ郊村園林ニ散歩シテ (欧 40べ5)

〔Ⅱ〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に付属語のつかない場合

(a) 漢語——漢語 (同語)

{ 土地貨財悉ク幼女フロレンスノ手ニ遺ス (欧 90べ8)  
 むづつ とち くわざいのこら おきなご  
 遺物の土地貨財残ず幼女フローレンスの所有とこそハ成にたれ  
 (通 110べ4)

(b) 漢語——漢語 (別語)

{ 衣裳風姿美ニ非ラサレト (欧 86べ10)  
 いふく まづきらし かざら  
 衣服ハ綺羅を飾ねど (通 102べ7)

{ アリス曰ク飢渴苦寒常ニ妾カ身ニ迫マル (欧 31べ9)  
 わらは まづきくらし おは つねに き かん おも ほか  
 妾ハ貧饑生活に追れ常に 飢寒を思ふの外 (通 42べ4)  
 ヒセジヤムヤ



(c) 漢語——和語

{ ジンシンキョウカク  
人品骨格亦賤 = 非ス (歐 86 べ 11)  
そのひとがら いせし  
其人品へ賤からず (通 102 べ 8)

{ ジンジヤウ  
主人少女共ニ其人ノ尋常ナラサルヲ察シ (歐 6 べ 5)  
おきな おとめ もあとも そのひとがら ぶつね  
野叟少女も諸共に其人相の尋常ならねば (通 8 べ 9)

{ ビンキョウ  
性敏捷ニシテ進退動作盡ク其度ヲ得 (歐 85 べ 12)  
さがいよ さかしく たちはりふるまひ みなそのほど ちほ  
其性最も敏捷て身の進退舉動も皆其度に適ざるなく (通 101 べ 10)

(d) 漢語——その他 (文)

{ 縦令天性ノ良智良心アルモ (歐 47 べ 7)  
たとひ りやうち りやうのう  
縦令良智と良能のあるも (通 59 べ 3)

〔Ⅲ〕四字漢語+の+体言の場合

(a) 漢語——漢語 (別語)

{ キ ケフソウボウ  
今や危急存亡ノ秋至レリ (歐 21 べ 3)  
いま ききく とまいた  
今や危急の秋至りぬ (通 27 べ 3)

{ ゴウクリ  
上帝造化ノ恩即チ彼ヲ生セシムルノ理ヲ説ケリ (歐 44 べ 11)  
ゴウクリ ぞうくわ ねん  
先第一には造化の恩 (通 57 べ 11)

(b) 漢語——和語

{ マダ  
荒原平蕪ノ中ニ迷ヒ (歐 14 べ 5)  
の ほら うち まよ  
原野の中に迷ひ (通 20 べ 1)

(c) 漢語——その他 (文)

{ 應對動作ノ禮ヲ教ユ (歐 48 べ 8)  
おひるつ たいちふるまひ とも ひやくとほ  
應對ぶりも動作も共に日々説すゝむれば (通 60 べ 1)

{ ゲンキ セキエン  
君ノ威威黙思ノ顔ヲ思ヘハ (歐 62 べ 9)  
きみ むき など い ちほ  
君の威儀正しく最とおごそかに在するを思へば (通 72 べ 12)

{ 君ノ喜笑<sup>ケツツ</sup>敬話ノ顔ヲ思ヘハ妾ノ心眞ニ喜悅<sup>キエツ</sup>ニ堪エス (欧 62べ10)  
 { 君の打解<sup>ウチトク</sup>テ 戲<sup>ハシ</sup>笑<sup>ウタ</sup>ひ居給<sup>ゐたま</sup>ふを思<sup>おも</sup>へば心最<sup>こころ</sup>と嬉<sup>うれ</sup>し (通 73べ1)

(d) 漢語——なし

- ・是レ春末夏初ノ天ナリ (欧 60べ6)
- ・生<sup>ヒタシ</sup>別<sup>コト</sup>死<sup>コト</sup>別<sup>コト</sup>ノ悲嘆<sup>ヒタシ</sup>交<sup>コト</sup>モ來<sup>コト</sup>テ (欧 83べ2)
- ・往々才<sup>サイ</sup>子<sup>シ</sup>美<sup>ミ</sup>男<sup>ヲ</sup>ノ讚<sup>サン</sup>称<sup>ショウ</sup>ニ遇<sup>ウ</sup>フト雖<sup>シ</sup>モ (欧 38べ4)
- ・マ<sup>マ</sup>ル<sup>ル</sup>ツ<sup>ツ</sup>ラ<sup>ラ</sup>バ<sup>バ</sup>ース<sup>ス</sup>ノ傍<sup>カタヘ</sup>ラニ來<sup>キ</sup>リ早<sup>ハヤ</sup>ク已<sup>マ</sup>ニ一<sup>イツ</sup>揖<sup>イツ</sup>握<sup>ワク</sup>手<sup>テ</sup>ノ禮<sup>レイ</sup>ヲ行<sup>ユク</sup>フ (欧 28べ2)

並立の関係 (2) <形状言+形状言>

〔I〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に付属語のつく場合

(a) 漢語——なし

- ・唯<sup>イ</sup>々<sup>、</sup>諾<sup>ダク</sup>々<sup>ニ</sup>シテ家事<sup>ツカサ</sup>ヲ司<sup>ツカサ</sup>トリ (欧 36べ8)

〔II〕四字漢語に付属語のつかない場合

(a) 漢語——なし

- ・所謂<sup>ソウゴウ</sup>剛<sup>ゴウ</sup>毅<sup>ギ</sup>木<sup>ボク</sup>訥<sup>ダツ</sup>仁<sup>ニ</sup>ニ近<sup>チカ</sup>キ者<sup>モノ</sup>ノ類<sup>ルイ</sup>ナリ (欧 40べ9)

並立の関係 (3) <動詞+動詞>

〔I〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「す」がつく場合

(a) 漢語——文

{ 今<sup>イマ</sup>ヤ危<sup>キ</sup>難<sup>ナン</sup>眼<sup>ガン</sup>前<sup>ゼン</sup>ニ迫<sup>セマ</sup>リ千<sup>チ</sup>思<sup>シ</sup>萬<sup>マン</sup>考<sup>コウ</sup>スレモ (欧 14べ9)  
 { 今<sup>イマ</sup>ヤ危<sup>キ</sup>難<sup>ナン</sup>の網<sup>コウ</sup>ニ入<sup>イ</sup>リ千<sup>チ</sup>思<sup>シ</sup>萬<sup>マン</sup>考<sup>コウ</sup>を摧<sup>クニ</sup>クとも (通 20べ4)

{ アリス<sup>アリ</sup>ス<sup>リス</sup>鑿<sup>ソク</sup>聲<sup>セイ</sup>低<sup>テイ</sup>聲<sup>セイ</sup>シテ曰<sup>イハ</sup>ク (欧 13べ8)  
 { アリスハ鑿<sup>ソク</sup>聲<sup>セイ</sup>め四<sup>シ</sup>邊<sup>ヘン</sup>顧<sup>コ</sup>視<sup>シ</sup>聲<sup>セイ</sup>を低<sup>テイ</sup>シ (通 17べ4)

〔II〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「す」のつかない場合

(a) 漢語——漢語 (同語)

{ 商<sup>シヤウ</sup>法<sup>ホフ</sup>ニオアリ勉<sup>コウ</sup>強<sup>コウ</sup>刻<sup>コウ</sup>苦<sup>コ</sup>年<sup>ネン</sup>ニ一<sup>イツ</sup>年<sup>ネン</sup>ヨリ富<sup>フ</sup>大<sup>ダイ</sup>ト爲<sup>ナリ</sup>リ (欧 91べ9)  
 { 商<sup>シヤウ</sup>法<sup>ホフ</sup>に最<sup>サイ</sup>と才<sup>サイ</sup>長<sup>チヤウ</sup>たるのみならず勉<sup>コウ</sup>強<sup>コウ</sup>刻<sup>コウ</sup>苦<sup>コ</sup>年<sup>ネン</sup>々に多<sup>タ</sup>少<sup>ショウ</sup>か儲<sup>マケ</sup>テ (通 110べ10)

(b) 漢語——文

{ 負郭<sup>フコク</sup> = 居ヲトシテ<sup>キヲトシテ</sup>優游<sup>ユウユウ</sup>自適<sup>ジシツ</sup> (欧 79 べ 6)  
負郭<sup>いなか</sup>に退隱<sup>ひきしりぞ</sup>き浮世<sup>うきよ</sup>の外の<sup>ほか</sup>の月花<sup>つきはな</sup>を詠<sup>な</sup>めて年月<sup>としづき</sup>を送<sup>おく</sup>りしが (通 94 べ 1)

(c) 漢語——なし

・憤懣<sup>フンモン</sup>號泣<sup>ガウキ</sup>天ヲ罵<sup>イハツ</sup>り地ヲ詈<sup>ノハン</sup>り (欧 85 べ 2)

主述の関係 (1) <体言+形状言>

〔1〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「の」が付いて体言につづく場合

(a) 漢語——漢語 (同語)

{ 風日美妍<sup>ふうじびけん</sup>ノ好時節<sup>こうじせつ</sup>トハナリヌ (欧 59 べ 5)  
風日美妍<sup>ふうじびけん</sup>の時節<sup>じせつ</sup>とは實<sup>けに</sup>此時<sup>このとき</sup>を言<sup>い</sup>なめり (通 69 べ 10)

(b) 漢語——文

{ 平蕪<sup>へいこ</sup>荒漠<sup>わくぼく</sup>ノ間遙<sup>まへ</sup>カニ一製造<sup>いっせいぞう</sup>所<sup>ところ</sup>ノ孤燈<sup>ことう</sup>明滅<sup>めいめつ</sup>タルヲ見<sup>み</sup>ル (欧 1 べ 12)  
野末<sup>のすま</sup>の草<sup>くさ</sup>の間隙<sup>あひだ</sup>より遙<sup>はるか</sup>に見<sup>み</sup>ゆる燈火<sup>とうま</sup>は (通 1 べ 10)

主述の関係 (2) <体言+動詞>

〔1〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「の」がついて体言につづく場合

(a) 漢語——漢語 (同語)

{ 君民<sup>くんみん</sup>共治<sup>きょうぢ</sup>ノ論<sup>ろん</sup>ヲ主張<sup>しゅちやう</sup>シ (欧 33 べ 6)  
君民<sup>くんみん</sup>共治<sup>きょうぢ</sup>の説<sup>せつ</sup>を主張<sup>しゅちやう</sup>し (通 44 べ 7)

(b) 漢語——文

{ 其<sup>その</sup>状態<sup>じやうたい</sup>毫<sup>ご</sup>モ男女<sup>なんにょ</sup>同室<sup>どうしつ</sup>ノ疑難<sup>ぎなん</sup>アルヲ知<sup>し</sup>ラサルカ如<sup>ごと</sup>ク (欧 33 べ 2)  
其<sup>その</sup>状態<sup>じやうたい</sup>毫<sup>ご</sup>も世<sup>よ</sup>の中<sup>なかに</sup>に男女<sup>なんにょ</sup>の間<sup>あひだ</sup>に同室<sup>どうしつ</sup>すべきことあるを<sup>し</sup>知<sup>し</sup>ざる者<sup>もの</sup>の如<sup>ごと</sup>ク  
に (通 44 べ 3)

修飾の関係 (1) <連体修飾語+被修飾語>

〔1〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に付属語のついた場合

(a) 漢語——漢語 (別語)

{ 共和政黨ナル書生ノ爲メニ (欧 33ペ7)  
 共和黨なる書生の爲に (通 44ペ8)

(b) 漢語——語十の十語

{ 同君才名ハ煥然トメ日耳曼全国ニ轟キ (欧 64ペ11)  
 君の才名は煥然として同国内に轟き (通 74ペ12)

(c) 漢語——なし

・ マルツラバース嘗テ日耳曼ニ在テ風流社會ニ優游シ (欧 38ペ4)

〔Ⅱ〕四字漢語十の十体言の場合

(a) 漢語——語十の十語

{ 人寰交際ノ道ニ跡トシ (欧 10ペ12)  
 人寰の交際に跡ければ (通 14ペ1)

{ 猶ホ普通學士ノ下ニ出テス (欧 86ペ3)  
 普通の學士に下らねば (通 102ペ1)

{ 英國會テ佛國北部ノ救援ヲ受ケ (欧 67ペ7)  
 抑 英國ハ (中略) 佛國の北部にて當時有名豪傑に救援を請て (通 78ペ1)

(b) 漢語——文

{ 中古封建ノ世ニ當テ (欧 68ペ9)  
 中古封建の世に當りて (通 79ペ4)

(d) 漢語——なし

・ アリスノ所行尋常處女ノ風ニ非ラサルモ (欧 51ペ7)  
 ・ ノーマンハ佛國北部ノ地名ナリ (欧 67ペ10)

修飾の関係 (2) <連体修飾語+数詞>

〔Ⅰ〕『歐州奇事花柳春話』の四字漢語に付屬語のつく場合

(a) 漢語——語十の十語

{ 蒸餅一片煨薯數個ト麥酒一杯トラ携へ來り (歐 10べ2)  
パン ヒトキレヤイセ やまいも ビール そへ もちきた  
ひとひら ばん そごぼく びみる そへ もちきた  
 一片の蒸餅若干の燒薯に麥酒を添て携來り (通 13べ1)

(b) 漢語——文

{ 今夕七時ヲ期シテ此所ニ來り (歐 26べ7)  
このなそがね あひつ みなと こゝ きた たま  
 此黄昏を合期として再び此處に來り給へ (通 35べ3)

(c) 漢語——なし

短歌一篇ヲ教エリ (歐 46べ6)

〔Ⅱ〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に付属語のつかない場合

(a) 漢語——文

{ 家屋ハ総テ白石ヲ以テ築キ客室九個、寢房八箇、厨廐并ヒ備フ (歐 68べ8)  
いへ おほむ いし も つく きやくまごも のつね ま やつ くり やう まや なら び ぞな  
 家屋ハ概ね白石以て作れり客室九箇寢房八個 厨廐も并備へり (通 79べ3)

(b) 漢語——数を示す語十の十体言

{ 蒸餅一片煨薯數個ト麥酒一杯トラ携へ來り (歐 10べ2)  
パン ヒトキレヤイセ やまいも ビール そへ もちきた  
ひとひら ばん そごぼく やまいも びみる そへ もちきた  
 一片の蒸餅若干の燒薯に麥酒を添て携來り (通 13べ1)

修飾の関係 (3) <連用修飾語+被修飾語>

〔Ⅰ〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「の」がついて体言につづく場合

(a) 漢語——なし

・人ヲシテ一日恍惚ノ情ニ堪ヘサラシム (歐 48べ6)

〔Ⅱ〕『欧州奇事花柳春話』の四字漢語に「の」がついて体言につづく場合

(a) 漢語——文

{ 卿ハ僕カ爲メニハ九死一生ノ恩人ナリ (歐 25べ5)  
おんみ やつかれ すくひ おんじん  
 卿ハ僕の九死を救し恩人なり (通 31べ10)

(b) 漢語——なし

・一身保護ノ利ヲ得ンヲ以テセハ (歐 46べ1)

### (3) 近代語の文献資料の調査

本年度は、九州大学の図書館および文学部の筑紫文庫と、熊本大学図書館の時習館文庫との明治初期洋学資料・翻訳小説・啓蒙書の調査を行なった。

九州大学では、笠国男、山崎正、中村強輔、西村健二の諸氏、熊本大学では、淵上順三、坂本竜蔵両氏のお世話になった。

また、国立国語研究所の20周年記念の展示会に、「明治初期の文章表記」というテーマで文献の展示を行なった。

## E 今後の予定

来年度は、(1)漢語研究の著書・論文目録作成の作業を継続する。(2)『通俗花柳春話』(2～4編)のカード採集を完了し、一覧表の作成、および『欧州奇事花柳春話』との比較研究に入りたいと考えている。

(飛田)

# 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

## A 目的と意義

電子計算機を使って、語彙調査・用字調査、あるいは用語索引の作成などを行なおうとすると、言語単位（単語）の認定や活用形の処理・漢字の取り扱い等、計算機に、ことばや文字を扱わせる上での、さまざまな問題が生じてくる。このような面での問題が解決されていないために、計算機の導入当初に実験した「くもの糸」の用語索引の作成（報告書 31・斎藤論文参照）や現在進行中の新聞の語彙調査・用字調査においては、ことばや文字の面の処理は、ほとんど人間の力にたよらざるをえなかった。処理システムの各所に、人手による作業が介在することは、処理の能率に大きく響くばかりでなく、データの等質性が保ちにくいために処理結果に思いがけないミスを生みやすい。

このような言語的な面での処理作業を、自動化していくことが、この研究の、さしあたっての目的である。しかし、言語的な処理を自動化するには、データの言語的な性格を分析し、一つ一つの処理について、もっとも基本的なところから処理手順を検討し、アルゴリズム（演算法則）を確定していかなくてはならない。したがって、当面の目的は、語彙調査・用語調査の処理システムの向上にあるとしても、その成果は、広く、言語データの機械処理に、理論的な根拠を与え、処理方法の合理化に役立つものとなろう。

## B 担 当 者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫・江川清・中野洋が担当し、第三資料研究室の石綿敏雄・言語計量研究室の斎藤秀紀・木村繁の協力のもとに進められた。また、第一資料研究室の小幡利子（44. 2. 1 第三資料研究室に配置換え）・益子芳江・堀江久美子が、研究作業を助けた。

## C これまでの研究経過

大量語彙調査に、電子計算機の導入が決定した年度において、将来開発する必要があるプログラムとして、つぎの四つがとりあげられ、おもに理論的な面の研究に着手した（年報17「電子計算機による大量語彙調査の準備的研究」118～119ページ）。

- 1) 自動単位分割
- 2) 自動よみがなつけ
- 3) 活用形の自動修正
- 4) 自動語彙分類

これらのうち、(1)の「自動単位分割」については、主として石綿敏雄が担当し、その結果は「電子計算機による言語単位分割自動化の研究——第一次報告（昭41・1月）」にまとめられている。これは、構文論的な考え方からせまる方法であるが、その後、江川清が、「漢字かな混り文の自動単位分割に関する一研究（計量国語学43・昭43・4月）」で、データの中の漢字・カナ・符号等の並び具合を手がかりとして単位切りを進める考え方を示した。

(2)の「自動よみがなつけ」については、テーブル・マッチング方式のみによる漢字の解読方法を検討し、田中章夫「電子計算機による漢字の自動解読とその問題点（計量国語学37・昭41・6月）」として発表した。

(3)の「活用形の自動修正」については、プログラムに組みこむ用言活用形のフォーマットを検討した程度で、具体的なシステム設計には、はいっていない。

(4)の「自動語彙分類」については、主として層別の分類法を扱ったものに林四郎「新聞語彙調査における層別とその意味（報告書34）」があり、意味からの自動分類法の基礎的な研究に、石綿敏雄「言語の意味と言語情報処理（報告書31）」がある。

以上のほか、システム設計の基本的な資料を得るため、42年度から、漢字かなまじり文のエントロピー（文字の現われ方についての連続確率）の計算



を行なった。これについては、斎藤秀紀「漢字かなまじりデータのエンтроピー（計量国語学43号・昭43・3）」に、テスト結果が報告されている。

## D 本年度の研究

前年度まで、主として理論的な側面を研究してきた課題のうちのいくつかについて、実際のシステム設計と、実験を行なった。

### 1) 言語単位の自動分割

漢字かなまじりのデータにおける文字・記号等の連続確率から、語の切れつづきを推定し、単位切りを進める方式と、構文論的な分析を自動的に進めて、その結果によって単位を切っていく方式の両方について、システム設計を行ない、両者とも、一応、所期の実験結果を得た。

前者については、長単位・短単位の二種類の単位切りを実験したが、いずれも、90%以上の成功率を収め、処理時間もきわめて短かった。後者は、文法規則を記憶した辞書を使うため、照合（辞書引き）に時間はかかるが、漢字かなまじり文に限らず、すべてのデータについて、広く使用できる。今回実験したデータについては、ほぼ完全に成功したが、辞書の拡充が、今後の課題である。（石綿敏雄・斎藤秀紀・木村繁「単語認定プログラム」情報処理学会CL委員会資料）

### 2) 漢字の自動解読

漢字かなまじりデータの中に現われる盤内漢字（漢字テラタイプに収められている漢字）2,110字を、自動的に解読し、適切なヨミガナをつけていくシステムを作成し、実験を行なった。新聞記事4,200字分についての実験結果は、処理時間17分程度で、成功率は、固有名詞をのぞいて80%程度であった。システムの内容については、田中章夫「漢字の自動解読システムについて（計量国語学48号）」に紹介してある。

### 3) 活用形の終止形変換

活用形の自動変換のうち、語彙表や用語索引の作成のさいに、まず必要となる「終止形変換」について、プログラムを作成した。このプログラムは、

新聞語彙調査の短単位処理システムの一部として、実際に使用される予定であるが、このプログラムの活用形テーブル（辞書）そのものは、活用形処理全般について使えるようになっている。また処理結果としては、終止形への変換結果のほか、活用形ごとの度数カウントも得られる。くわしいことは、江川清「活用形処理の自動化に関する一方式（報告書34）」を参照されたい。

#### 4) 層別・類別語彙表の作成システム

語彙分類の自動化については、まだ、実際のシステム設計には、はいっていないが、入力情報に基づいて各種の語彙表を作成するシステムを作成しつつある。層別語彙表作成システムについては、すでに41年度に作成を完了し、42年度から新聞語彙調査の長単位処理システムの一部として実際に使われている（年報18・19「新聞の語彙調査」に報告済み）。43年度においては、層別語彙表作成システムの結果に基づいて、層別特徴語を検出するプログラムを作成し、41年版朝日新聞朝刊半年分をデータとして、実験を試みた。実験結果は、木村繁「層別特徴語の判別（報告書34）」に紹介されている。

類別語彙表の作成システムについては、データに付いている位置（語構成）情報、語種情報、品詞情報、活用情報を利用して、各種の語彙分類を自動的に実行し、語彙表を作成するシステムを作った。このプログラムは、語彙調査の短単位処理システムの一部として使用されるものである。内容については、中野洋「語彙調査の類別語彙表（報告書34）」を参照されたい。

上記のほか、文部省科学研究費（試験研究）による「言語情報処理における漢字処理の実験的研究（研究代表者・林四郎）」として、漢字かなまじりデータを、全文かな・ローマ字に変換するシステムの作成を行なった。

#### 報告書等の刊行

現在進行中の新聞語彙調査の処理システムの紹介と、言語情報処理に関する諸研究の報告とを内容とする「国立国語研究所報告34・電子計算機による国語研究(Ⅱ)——昭44・3月」を刊行した。目次は、つぎの通りである。

- |      |                              |
|------|------------------------------|
| 林 四郎 | 新聞語彙調査における層別とその意味            |
| 斎藤秀紀 | 電子計算機による語彙調査 ——主として長単位処理について |

- 木村 繁 層別特徴語の判別
- 中野 洋 語彙調査の類別語彙表について
- 江川 清 「活用形処理」の自動化に関する一方式
- 石綿敏雄 COBOLによる漢字索引作成
- 野村雅昭 新聞使用漢字の試行的分析
- 田中章夫 漢字かなまじり文を全文カナ書き・ローマ字書きに変換するシステムについて
- 石綿敏雄 構文解析自動化の研究Ⅰ  
——CLからの構文論の見直し
- 木村 繁 構文解析自動化の研究Ⅱ  
——文構造解析のプログラムからプログラム言語へ

また、所内研究資料として、LDP（月報別冊）1を5月に、LDP2を10月に刊行した。内容は、つぎの通りである。

#### LDP 1

- 斎藤秀紀 電子計算機による新聞の用語調査
- 木村 繁 A0～J1の延べと異なり
- 土屋信一 送りがな調査の集計システム
- 野村雅昭 漢字調査の機能処理について
- H.A.Simon 知性の発達についての情報処理理論  
江川清訳
- 石綿敏雄 「言語の意味と言語情報処理」修正補記

#### LDP 2

- 林 四郎 ローマ字データ段落別語彙調査プログラム
- 木村 繁 長単位比率計算用プログラム  
斎藤秀紀
- 野村雅昭 総合漢字テーブルの構想
- 斎藤秀紀 漢テレーLP 文字変換プログラム
- 木村 繁 COBOL用 平方根サブルーチン
- 石綿敏雄 構文解析自動化の研究

## E 今後の予定

今年度作成した「自動単位切り」「漢字の自動解読」「活用形処理」「類別語彙表作成」の各プログラムを、さらに改良して、処理の能率と精度を高める予定である。また、現在、手作業によって行なっている付加情報（位置情報・語種情報・品詞情報・活用情報）の書きこみを、自動化することも目ざしている。そして、最終的には、以上のプログラムを、一本のシステムに、有機的に組み合わせて、「単位切り→ヨミガナつけ→終止形変換→付加情報の記入→類別語彙表の作成」を、一貫して行ないうるプログラム・システムの完成を目標としている。

また、「言語情報処理における漢字処理の実験的研究」としては、「漢字一かな（ローマ字）相互変換システムの」設計を進める予定である。

（田中）

# 社会構造と言語の関係についての基礎的研究

## A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

調査地点としては福島県伊達（だて）郡保原（ほばら）町地区および福島市郊外の茂庭（もにわ）地区を選んだ。

## B 担当者

飯豊毅一（音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、東郷はるみ（旧姓河東, 43. 5. 20 退職）、中島美智子（44. 6. 1 採用）が作業を助けた。

## C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は昭和42年度までに次のようなことを行なった。

- (1) 老年層を対象とする、音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系（親族語および形容詞・形容動詞）の調査。これについては「福島県北部方言の親族語と形容詞の語彙体系——福島北部調査報告1」（国立国語研究所論集3『ことばの研究』昭和42年3月）や国立国語研究所年報19等にその一部を報告した。なお、この地の方言体系の特質を明らかにするために東北地方・関東地方等の各地についても参照調査を行なった。

(2) 録音資料による実態調査。話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するために録音採集を行ない、そのうち8時間分について文字化し、これより採集した約7万枚のカードによって分析を始めた。これは本年度に継続する。その一部については国立国語研究所年報17・18・19に報告した。

(3) 社会構造の調査。各種統計表や記録により概観調査を実施した。その一部は『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)——親族語彙と社会構造——』（国立国語研究所報告32）に報告した。

(4) 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連の調査。親族語彙について、それが親族組織およびその社会生活における機能とどのような関係にあるかをみようとした。これについては前記の国立国語研究所報告32にその一部を報告した。

## D 本年度の作業

### 1 言語および言語使用の調査

#### 1.1 音韻体系および文法体系の概略の調査

前年度までに準備調査として、保原地区および茂庭地区の音韻体系・文法体系の概略の調査を行なったが、本年度もその補正調査を行なった。さらにこの地域の方言体系の特質や全国方言における位置を明らかにするために、東北地方（宮城県白石市ほか）や九州（大分県延岡市）において参照調査を行なった。

#### 1.2 録音資料による言語使用の調査

前年度にひき続き、約8時間分の録音資料について、分析を行なった。

分析を行なった項目は次の通り。

保原地区4時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 19,042）

(1) 語中・語尾において、共通語 -k- 音に対応して、どのような音声がいられ いるか（-k- か、-g- か）。

(2) 共通語の「～すれば」「～すると」「～するなら」などに対応する

仮定の条件などを表わす表現が、どのように用いられているか。

茂庭地区4時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 18,010）

- (1) 語中・語尾において、共通語 -t- 音に対応して、どのような音声  
が用いられているか。
- (2) 共通語の動詞に接続助詞 *te* および完了の助動詞 *ta* が連なってい  
る形が *-rete*, *-reta* であるものに対応して、どのような形が用いら  
れているか。
- (3) 共通語の「～へ」「～に」に対応する表現がどのように用いられて  
いるか。

## 2 社会構造と語彙およびその用法との関連について

### 2.1 社会構造と親族語彙

親族語彙を中心として、社会構造と方言語彙との関係をみようとした。  
本年度は、特に同族団をさし示す俚言をとりあげた。

マキ・マケは、東北地方や関東甲信越地方など、主として東日本地方に  
広く分布する俚語である。このマキ・マケという俚言のさし示す社会的事  
柄を、社会学者や民族学者は、本家一分家の家連合、つまり同族団として  
とらえ、昭和10年代以降それについてのくわしい研究をつみ重ねてきた。  
日本の農村社会学は、この同族団の研究を軸にして発展してきた、といっ  
てもあながち過言ではない。

しかし、この主として東日本地方一円に広く分布しているマキ・マケの  
俚言としての意味用法を細かに検討していくと、これまでの社会学・民族  
学において形成されてきた同族団学説の一部にかなり大きな修正意見を提  
出することができるように思える。このことについては、昭和44年度に刊  
行する予定の報告書『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)——  
マキ・マケの場合——』の中で、くわしく報告する。

### 2.2 「对人的言語行動の研究」のまとめ

渡辺が言語効果研究室で昭和39年度に主として分担していた課題「对人的  
言語行動の研究」のまとめを、本研究室における本年度の渡辺の仕事の

一つとした。まとめた調査結果の一部は、報告書『家庭における子どものコミュニケーション意識』として43年12月に刊行した。

### 3 社会構造の調査

本年度も前年度にひき続き、記録や各種統計表による概観調査を行なった。

## E 今後の予定

- (1) 言語および言語使用の面においては、さらに場面により使用語がどのように異っているか、あるいは言語と言語使用についてのこの地域の人たちの意識がどのようなものであるか等について調査を進める予定である。
- (2) また、社会構造と語彙およびその用法との関連についても、通信調査をも含めつつ、さらに各方面から調査を進め、両者の関係を追究しようとしている。

(飯豊)



# 現代語の表記法に関する研究

——送りがな・漢字——

## A 目的・意義

国語の正書法を確立するうえで役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

## B 担当者

調査研究の担当者は、石綿敏雄・土屋信一・野村雅昭の三名であり、菅野裕子（44. 1. 31 退職）・小幡利子（44. 2. 1 第一資料研究室より配置換え）が作業を助けた。

## C これまでの経過

国語の文字表記についての諸問題を明らかにするために、これまで二つの方向から調査研究を進めてきた。一つは文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象とした、表記行動に関する調査研究であり、いま一つは、書かれた文字資料を対象とした文字表記の調査研究である。

前者として40年度から、「文字使用の実態調査」を採り上げ、後者として42年度から、「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を採り上げ、調査研究を進めてきた。

「文字使用の実態調査」は、文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象として、その表記の実態や、文字・表記に対する意識・態度を調査することを意図している。40年度には送りがな・かな書きの問題を中心に小規模の準備調査を実施し、41年度には約180人の被調査者に対して、同じく送りがな・かな書きの問題を中心とした前調査を実施し、調査票の構成や質問形式および分析方法等につき検討した。その結果、本調査は送りがな表記の問題に限り、対象は中学生・高校生・大学生、およびふだん文字に接する機会の

多い社会人約3,000人とし、集計には電子計算機H I T A C 3010を使用することに決めた。本調査は41年度末から42年度9月にかけて実施し、引き続き集計作業を進め、42年度末までに一部集計表を作成した。（『年報』18・19参照）

「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」は、第一資料研究室と言語計量調査室で実施している、電子計算機による「新聞の語彙調査」にともない、漢字および表記の研究を行なうものである。語彙調査によって作成されたデータ（磁気テープ）に、さらに機械処理を加え、アウトプットされたデータに人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成する。そして、その分析・記述を行なうというのが、そのあらましである。

42年度には、電子計算機による処理方法の研究、ならびに、長単位語データによる、漢字調査の機械処理システムの設計およびプログラムの作成を行なった。

## D 本年度の作業

### I 文字使用の実態調査（継続）

本年度は、当初(1)集計作業の実施、(2)分析、(3)報告書原稿の記述、を予定し、年度末に報告書を刊行して調査研究を終了する予定であったが、(2)および(3)の一部を残した。これは集計作業に非常に時間を要し、11月まで研究員の手を取られたことが大きな原因である。

#### (1) 集計作業の実施

前年度に引き続き、「作業の流れ」（『年報』19の128ページ参照。）に従い、11.2(1)より集計作業を進めた。ただ、集計用プログラムは、これまでのように横軸に年齢別を取った表しか作らないものから、任意の8コラムを取れるように改めた。これで、この調査の集計のためのプログラミングは終了した。

本年度に集計作成した表は次のとおりである。

1 各調査語の学歴別・経験年数別・文字生活の程度（新聞を読む時間・手紙

を何通出すかなど) 別の表。

2 各調査語における「書く表記」と「読みにくい表記」との組み合わせの、  
集団別・年齢別の表

3 関係のある調査語の組み合わせの、年齢別・集団別などの表。

「関係のある調査語」とは次のとおりである。

(i) 同類と考えられる語の組み合わせ

調査語46語は、語の質から分類すると、次のようになる。

単純名詞1…養う・現われる・異なる・表わす・行なう

単純名詞2…終わる・合わせる・上がる・集まる・生まれる

複合動詞1…割り当てる・受け付ける・売り出す

複合動詞2…申し合わせる・誘い合わせる・向かい合う・生まれ変わる・  
浮かび上がる

単純名詞0…隣・お互いに・幸い・情け・後ろ側

単純名詞1…割り・祭り・勢い・晴れ・行ない・断わり・次・話

単純名詞2…集まり・起こり・終わり

複合名詞1…大売り出し・割合・払い下げ・組み合わせ・申し合わせ事項  
・受付係

複合名詞2…晴れ着・上がり口

複合名詞3…手続き・役割・昭和生まれ・値上がり

(ii) 単純語と複合語

単純動詞と複合動詞…合わせる—申し合わせる, 合わせる—誘い合わせる,  
生まれる—生まれ変わる, 上がる—浮かび上がる

単純名詞と複合名詞…晴れ—晴れ着, 割り—役割

(iii) 動詞と名詞

1 単純動詞と単純名詞…行なう—行ない, 終わる—終わり, 集まる—集まり

2 複合動詞と複合名詞…受け付ける—受付係, 売り出す—大売り出し, 申  
し合わせる—申し合わせ事項

## (一) 複合語の前部分と後ろ部分

### 上がり口一値上がり

以上は、電子計算機によって作成した、または、人手によって書き改めた表であるが、二つの表記の組み合わせについては、分析にはいる前に、さらに人手による集計作業をした。それは、二つの表記のいずれにどの程度傾いているかを数値で表わす作業である。例えば、動詞オコナウと名詞オコナイについて、同一個人が「行なう」「行ない」または「行う」「行い」と表記している場合には傾きをゼロと考え、「行なう」、「行ない」「行い」なら名詞に1だけ傾いている、「行なう」、「行い」なら名詞に2だけ傾いているというように数値化し、各語の組み合わせについて、集団別・年齢別に、その傾きの数値の平均値と分散とを計算した。

## (2) 分析

本年度に分析を完了した事項は次のとおりである。

### 1 被調査者に関する分析

- ・項目Aに関する分析…層・年齢・学歴・経験年数・新聞を読む時間・雑誌を読む程度・手紙を書く数、など。
- ・項目Cに関する分析…送りがな表記に迷うことがあるか、内閣告示「送りがなのつけ方」を知っているか、またどう使っているか、など。

### 2 個々の語の送りがな表記の分析

層別と送りがな、年齢と送りがな、学歴と送りがな、経験年数と送りがな、新聞を読む時間と送りがな、など。

分析の済んだものから、記述を進め、報告書の原稿としてかなりの分量に達したが、まだ以下の分析項目が残っているため、44年度に分析が完了するのをまって、一括して報告書として刊行する予定である。

今後分析を進めていく項目

- 1 名詞と動詞との相関、単純語と複合語との相関
- 2 同類の語の相関関係
- 3 実際に書く表記と読みにくいとする表記との関係

#### 4 内閣告示「送りがなのつけ方」に関する関心と送りがな表記との関係

##### Ⅲ 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究（継続）

本年度は、昨年度に引き続いて、漢字に関する調査研究を行なった。漢字の処理は、度数の集計に主眼を置く、長単位語データによるものと、よみがな・語種などの情報を持った、短単位語データによるものことからなる。本年度は、前者に重点を置いて処理を行なった。

##### (1) 機械処理プログラムの作成

漢字調査のシステムを構成するプログラムのうち、漢字抽出プログラムと情報書きこみプログラムは、すでに、昨年、完成したので、本年度は、次の(i)(ii)を作成した。

(i) 度数カウントプログラム…漢字や用語例について、全体と層別の度数をカウントする。

(ii) 印字処理プログラム…各配列順の層別度数表をラインプリンターで、その見出し字を漢テレで印字する。また、各漢字について、その長単位語の用語例を漢テレで、その出典情報をラインプリンターで印字する。

##### (2) 1紙1年分長単位語データの機械処理（注）

(1)の各プログラムにより、次にあげるものを作成した。

##### (i) 計算機オペレート

- ・ 1紙1年分度数台帳（部首順・度数順・五十音順）・同度数表
- ・ 1紙1年分用例台帳
- ・ 1紙1年分出典台帳
- ・ 1紙朝刊前半分層別用例台帳
- ・       "       "       出典台帳・同出典表

##### (ii) 漢テレ印字

- ・ 1紙1年分各配列順度数表見出し漢字

---

(注) 「1紙1年分」については、言語計量調査室の報告参照。

・ 1 紙朝刊前半分層別用例表

なお、1 紙 1 年分の漢字度数集計の結果を下にあげておく。

(3) 層別漢字表（1 紙朝刊前半分）の作成

(2)で作成した、1 紙朝刊前半分用例表によって、層別区分ごとに、音訓、人名・地名などの用法が一覧できる漢字表の作成を始めた。これは、44年度中に完成する予定である。

(4) 漢字の量的構造に関する試行的分析

1 紙朝刊前半分の度数集計の結果に基づいて、新聞における漢字の量的構造の特徴、層別による漢字使用の特色などについて、実験的な分析を行った。なお、本研究室では、語彙調査の層別区分を参考としながら、話題別による区分を中心にした、12の層別区分を採用している。分析の結果および層別区分の方法については、下記の文献を参照されたい。

野村雅昭「新聞使用漢字の試行的分析」(国研報告<sup>34</sup> 所収)

漢字調査 1 紙 1 年分 区分別ことなり度数とのべ度数

話 題 区 分		ことなり度数	の べ 度 数	の べ %
1	政 治・労 働	1,603	51,171	8.12
2	外 交	894	6,520	1.03
3	経 済	1,405	65,507	10.39
4	社 会・地 方	1,956	92,865	14.37
5	国 際	1,522	41,264	6.55
6	文 化	1,812	35,819	5.68
7	ス ポ ー ツ	1,476	35,071	5.56
8	婦 人・家 庭	1,383	14,614	2.32
9	芸 能・娛 楽	1,995	56,468	8.96
10	小 説・漫 画	1,292	6,839	1.09
11	商 業 広 告	2,197	70,446	11.18
12	案 内 広 告	1,941	153,729	24.39
全 体		2,883	630,313	100

漢字調査 1紙1年分 度数分布表

度数区間	ことなり 度数	のべ度数	累計ことなり		累 計 の べ	
			度 数	使用率(%)	度 数	使用率(%)
～5,001	6	45,136	6	0.2	45,136	7.2
5,000～4,001	6	25,905	12	0.4	71,041	11.3
4,000～3,001	9	32,702	21	0.7	103,743	10.5
3,000～2,001	26	63,817	47	1.6	167,560	26.6
2,000～1,001	112	150,611	159	5.5	318,171	50.5
1,000～ 901	25	23,668	184	6.4	341,839	54.2
900～ 801	26	22,042	210	7.3	363,881	57.7
800～ 701	27	20,140	237	8.2	384,021	60.9
700～ 601	27	17,472	264	9.2	401,493	63.7
600～ 501	64	35,396	328	11.4	436,889	69.3
500～ 401	74	33,417	402	13.9	470,306	74.6
400～ 301	111	37,543	513	17.8	507,849	80.6
300～ 201	167	41,996	680	23.6	549,845	87.2
200～ 101	279	39,675	959	33.3	589,520	93.5
100～ 91	37	3,510	996	34.5	593,030	94.1
90～ 81	42	3,563	1,038	36.0	596,593	94.7
80～ 71	69	5,224	1,107	38.4	601,817	95.5
70～ 61	81	5,273	1,188	41.2	607,090	96.3
60～ 51	61	3,338	1,249	43.3	610,428	96.8
50～ 41	101	4,609	1,350	46.8	615,037	97.6
40～ 31	133	4,708	1,483	51.4	619,745	98.3
30～ 21	145	3,685	1,628	56.5	623,430	98.9
20～ 11	236	3,536	1,864	64.7	626,966	99.5
～ 10	28	280	1,892	65.6	627,246	99.5
～ 9	32	288	1,924	66.7	627,534	99.6
～ 8	56	448	1,980	68.7	627,982	99.6
～ 7	50	350	2,030	70.4	628,332	99.7
～ 6	49	294	2,079	72.1	628,626	99.7
～ 5	64	320	2,143	74.3	628,946	99.8
～ 4	76	304	2,219	77.0	629,250	99.8
～ 3	117	351	2,316	81.0	629,601	99.9
～ 2	165	330	2,501	86.1	629,931	99.9
1	382	382	2,883	100.0	630,313	100.0
合 計	2,883	630,313				

## E 今後の予定

### (1) 文字使用の実態調査

分析および結果の記述は、44年度中に完了し、報告書原稿としてまとめ、刊行する予定である。

### (2) 新聞の漢字および表記の研究

44年度は、漢字について、1紙1年分の長単位語用例表、1紙朝刊前半分の層別漢字表の作成を行ない、その分析に着手する。また、短単位語データによる、機械処理システムの設計および実際の機械処理を実施する。

さらに、表記についても、処理システムの設計を始め、まぜ書き語、かな書き語などの一覧表を作成する予定である。

(石綿)



# 電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

## A 目 的

婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種と続けてきた現代語の用語の実態調査を、カードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して、データの処理量をふやし、語彙調査の結果を今日的課題の解決に役立つようにすることを目的とする。

## B 担 当 者

第一資料研究室の田中章夫、南不二男(43.2.28海外出張)、江川清、中野洋、および言語計量調査室の斎藤秀紀、木村繁が、これに当たり、第一資料研究室の小幡利子(43.2.1 第三資料研究室へ配置換え)、益子芳江、堀江久美子、花井夕起子、言語計量調査室の阿部典子(44.3.31 退職)、中野三千子(43.7.31 退職)、篠田美代子、小高京子、田中由起子(43.8.1 採用)が、研究作業を助けた。なお、プログラムの作成、機械のオペレートなどの面で、日立電子サービスKKから電子計算機の保守員として派遣されている吉崎孝雄氏の助力を得た。

## C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞三紙(朝日・毎日・読売)一年分を対象とする語彙調査は、昭和41年度から作業にとりかかり、42年度末までに、\*サンプリング作業、計算機にかけるための前処理作業、および\*長単位処理プログラムの作成は、ほぼ完了し、1紙朝刊半年分について、テスト・ランを実施した。漢字テレ・タイプによる原データのさん孔作業と、それを入力して長単位関係各種ファイル(磁気テープ)を作成するオペレート作業とは、昭和42年度末までに、全体の3分の1に当たる1紙1年分について終了した。

## D 本年度の研究作業

本年度は、全体の3分の1に当たる1紙1年分について、<sup>\*</sup>短単位の処理を進め、中間的な結果をまとめるための作業を中心として、研究作業を進めた。

### 1 長単位入力データの検査

長単位入力データの前処理（単位切り・層別記入・清書等）の作業は、前年度において、全部終了したが、その検査は、全体の3分の2に当たる2紙1年分が、本年度にもちこされた。本年度末までに、1紙朝夕刊半年分を残して、他は、検査を終了した。

### 2 長単位入力データのさん孔

長単位入力データのさん孔作業は、1紙夕刊半年分を消化したのみであるが、これは、短単位入力データのさん孔作業に主力を注いだためである。

### 3 長単位関係のオペレート作業

昨年度、すでに作成済みの1紙1年分長単位ファイル（磁気テープ）から、各種長単位表を作成するためのオペレート作業を実行し、上位11043語（異なり数）について、出典表（簡易五十音順）、度数順表、層別表（度数順）を、ラインプリンターに出力し、それぞれの見出し語を漢テレで印字した。

### 4 各種長単位表の作表作業

ラインプリンタが打ち出した出典表・度数順表・層別表と、漢テレが、印字した見出し語とを、転写し、「簡易五十音順長単位表」と「度数順層別長単位表」を作成した。また、この二つの表を使って、「長単位層内順位表」を手作業で作成した。これは、各層の上位100位までの長単位を、度数順に配列し、各々の見出し語に、層内での順位と、層内での出現率をつけたものである。

### 5 短単位入力データの作成作業（中処理）

長単位処理の結果、出力されてきた長単位の見出し語に、よみがなをつ

け、付加情報（位置情報・語種情報・品詞情報・活用情報）を記入し、清書検査を経て、さん孔作業に渡すまでの処理である。この作業は、中間報告を行なう1紙1年分については、全部終了した。

## 6 短単位入力データのさん孔

中間報告が予定されている1紙1年分についての、短単位入力データのさん孔作業は、本年度内に全部終わった。

## 7 短単位処理システムの作成

短単位データの機械処理のための処理システムは、つぎの5本のプログラムからなる。

- ・入力データ・チェック・プログラム  
——データのミス、漢テレの機械的なミスパンチ等のチェックを行ない、エラー・データを排除するプログラム
- ・短単位ファイル作成プログラム  
——短単位入力データから、短単位ファイル（磁気テープ）を作成するプログラム
- ・活用形処理プログラム  
——活用形を、終止形に変換し、各活用形ごとの度数を合計するプログラム
- ・短単位出力用プログラム  
——短単位の五十音順表・度数順表等を、ラインプリンターに打ち出すと同時に、見出しを紙テープ（漢テレ出力用）にパンチアウトするプログラム
- ・類別短単位表作成プログラム  
——位置（語構成）情報・語種情報・品詞情報を利用して、語種別短単位表、品詞別短単位表等を作成するプログラム

以上についてのシステム設計・プログラムの作成は、本年度中に、完了したが、テスト・ランは来年度にもちこしとなる。

## E 今後の予定

44年度中に、1紙1年分の長単位・短単位の処理を終了し、これについて中間報告を行なう。残り2紙については、長単位入力データのさん孔、短単位入力データの作成とさん孔を進める。

機械処理関係では、1紙1年分の短単位処理を行なって、中間報告用の出力データを作るとともに、残り2紙の長単位処理を継続する。

注) \*印については昭和42年度の年報(19)に報告済み。

(田中)

# 国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和43年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞について文献調査を行なった。これらの文献目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和44年版）に掲載されている。

以下、そのおのおのについて分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。（ ）内に前年の数を示し、今年のものと比較できるようにした。

なお、この調査および国語年鑑に関する作業は、次のものが担当した。

田原圭子 伊藤菊子 中曾根仁

## I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化し、総数450冊の分類目録を作成した。

### 刊行書の分類と、その冊数

国語(学)		文法	7 (8)
国語一般	15 (18)	文章・文体	6 (9)
国語史	23 (17)	方言・民俗	43 (27)
音声・音韻	2 (4)	コミュニケーション	
文字・表記	6 (14)	コミュニケーション一般	15 (8)
語彙・用語		言語技術(話し方・書き方)	30 (23)
語彙・用語	7 (8)	情報処理	5 (6)
人名・地名	6 (11)		

マス・コミュニケーション	8 (8)	辞典・用語集一般	0 (1)
国語国字問題	3 (2)	国語辞典	7 (13)
国語教育		用語辞典・用語集	17 (15)
国語教育一般	6 (4)	特殊辞典	15 (5)
学習指導一般	22 (15)	索引	11 (11)
語彙・文字教育	7 (2)	資料	
文法教育	1 (2)	資料	22 (15)
聞く・話す	1 (1)	史料	11 (17)
読む・読書指導	21 (11)	解題・目録	12 (16)
書く・作文指導	15 (10)	年鑑	13 (13)
文学教育	2 (2)	計	403(382)冊
幼児教育	0 (6)	追補	
特殊教育	4 (2)	国語学その他	10 (20)
学力調査	1 (2)	方言	19 (8)
国語教科書・その他	5 (15)	コミュニケーション, マス・ コミュニケーション	5 (0)
日本語の研究と教育	10 (2)	国語教育	1 (11)
言語学その他	24 (39)	言語学その他	3 (3)
辞典・用語集		辞典・用語集・資料	9 (13)
		総計	450(437)冊

## Ⅱ 雑誌論文の調査

主として当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は2,469点に達した（連載物などについては，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた）。

### 1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数

#### a 一般刊行雑誌（学会誌も含む）……266(254)種

国語・国文・言語ほか	115 (97)	国語教育	24 (24)
方言・民俗	8 (12)	マス・コミ関係	15 (15)
国語問題	4 (4)	外国語	10 (9)

週刊誌	1 (1)	理学ほか)	69 (71)
文芸・詩歌・芸能	7 (8)	本年度臨時にはいった雑誌	
その他(教育・社会学・心)			13 (13)

b 大学・研究所等の紀要・報告類……209(193)種

## 2 論文・記事の分類とその点数

<b>国語(学)</b>	145 (101)	<b>古典の注釈</b>	
<b>国語史</b>		上古	8 (9)
国語史一般	33 (23)	中古	20 (18)
訓点資料関係	17 (20)	中世	8 (14)
<b>音声・音韻</b>		近世以降	15 (12)
音声・音韻一般	25 (10)	<b>方言・民俗</b>	
史的研究	17 (7)	方言一般	38 (24)
アクセント・イントネーション	5 (6)	各地の方言	
<b>文字・表記</b>		東部	26 (23)
文字・字体	13 (12)	西部	18 (39)
用字	9 (16)	九州・沖縄	13 (24)
表記	22 (23)	民俗	3 (1)
<b>語彙・用語</b>		<b>コミュニケーション</b>	
語彙・用語一般	37 (46)	コミュニケーション一般	13 (7)
古語	58 (39)	言語生活	29 (23)
現代語	40 (27)	言語活動	
新語・流行語	2 (3)	言語活動一般	12 (23)
外来語	4 (3)	書く・読む	61 (23)
名づけ	8 (10)	話す・聞く	37 (20)
辞書・索引	7 (18)	情報処理	35 (33)
<b>文法</b>		<b>マス・コミュニケーション</b>	
文法上の諸問題(現代語法)	59 (79)	一般的问题	3 (3)
文法の史的研究	45 (56)	新聞	1 (5)
敬語法	31 (33)	放送	12 (11)
<b>文章・文体</b>		広告・宣伝	3 (3)
文章・表現一般	71 (38)	出版	8 (2)
史的研究	74 (72)	<b>国語問題</b>	
		国語問題一般	39 (24)
		表記法	13 (13)
		当用漢字など	13 (19)

<b>国語教育</b>	
国語教育一般	48 (39)
言語能力の発達	7 (14)
国語教育史	24 (9)
学習指導一般	122 (57)
視聴覚教育	6 (0)
ことばの教育一般	22 (11)
文字・表記教育	31 (16)
語彙教育	21 (9)
文法教育	50 (7)
ローマ字教育	0 (5)
聞く・話す	
聞く・話す一般	9 (14)
話しことば指導	22 (5)
読む・書く	
読む・書く一般	27 (36)
読解指導	57 (33)
読書指導	13 (27)
作文教育	79 (44)
文学教育	13 (21)
古典教育	14 (13)
漢文教育	2 (5)
特殊教育	11 (19)
学力評価	4 (9)
国語教科書・教材研究	45 (28)
<b>日本語の研究と教育</b>	
22	(17)
<b>言語学</b>	
言語一般	120 (95)
意味	30 (11)
比較研究	22 (22)
翻訳の問題	15 (6)
外国語研究	31 (28)

外国語教育(学習)	59 (28)
各国の言語問題	17 (17)
<b>資料</b>	
資料一般	0 (3)
国語資料	14 (8)
翻刻	20 (15)
目録	4 (4)
<b>時評・随筆</b>	
46	(32)
<b>書評・紹介</b>	
国語(学)その他	24 (30)
語彙・文法	16 (12)
辞書・索引	12 (5)
文章・文体	11 (10)
方言・民俗	3 (5)
国語教育	14 (12)
言語(学)その他	17 (22)
<u>計 2,274(1,831)点</u>	

<b>追補</b>	
国語(学)その他	12 (38)
音声・音韻	16 (6)
文字・表記	5 (14)
語彙	50 (40)
文法	22 (38)
文体	6 (24)
方言	12 (29)
国語問題	3 (6)
国語教育	25 (9)
日本語の研究と教育	14 (8)
言語(学)その他	30 (52)
<u>総計 2,469(2,095)点</u>	

### Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資



料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き総数は 1,338 点で、その内訳は次のとおりである。

### 1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		北海道	97 (115)
朝日	253 (524)	西日本	128 (78)
※ (大阪)	11 (4)	週刊・その他	
毎日	154 (135)	日本読書	12 (0)
(大阪)	1 (—)	読書人	35 (35)
読売	192 (258)	図書	31 (0)
(大阪)	10 (1)	新聞協会報	26 (23)
東京	154 (102)	教育学術	11 (18)
産経	91 (110)	その他	55 (35)
日本経済	77 (80)		
		計	1,338 (1,639)点

※ (大阪) は、各紙の大阪版である。山田房一氏から、関係記事のあるごとに恵送されたものである。

### 2 月別の切り抜き点数

1月	87 (143)	2月	87 (170)	3月	109 (191)
4月	132 (127)	5月	112 (127)	6月	118 (132)
7月	104 (119)	8月	110 (136)	9月	89 (105)
10月	130 (127)	11月	136 (130)	12月	124 (132)

### 3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	128 (119)	辞書	23 (31)
音声・音韻	9 (19)	問題語・命名	64 (89)
文字		人名・地名	18 (71)
文字・表記	2 (13)	文法	2 (6)
活字	1 (3)	文体	
語彙		文体・表現	24 (10)
語彙一般	50 (304)	方言	
各種用語	1 (58)	方言一般	16 (19)
新語・流行語・隠語	34 (16)	方言と標準語	6 (3)
外国語・外来語	49 (23)	各地の方言	92 (30)

言語生活	
言語生活一般	47 (61)
ことばの問題	14 (21)
ことばづかいの問題	32 (45)
敬語の問題	9 (22)

言語活動	
言語活動一般	5 (8)
話すこと(聞くこと)	29 (47)
書くこと(読むこと)	19 (6)
読書	11 (10)

ことばと機械	42 (31)
--------	---------

国語問題	
国語問題一般	57 (35)
表記の問題	
表記一般	16 (10)
当用漢字など	61 (77)
かなづかい	3 (8)
送りがな	2 (2)
かな書き	7 (6)
横書き・縦書き	1 (5)
人名・地名の表記	14 (5)
外来語表記	1 (—)
ローマ字	2 (10)

国語教育	
国語教育一般	33 (47)
学習指導の問題	

学習指導一般	19 (8)
話す(聞く)	5 (4)
読む(読書指導)	10 (5)
書く(作文指導)	10 (14)
文学・古典教育	9 (5)
特殊教育	15 (15)
視聴覚教育	— (1)
ローマ字教育	— (11)
学力テスト	3 (6)
幼児語教育	15 (15)

言語学	
言語一般	40 (21)
外国語一般	16 (29)
比較研究	4 (6)
翻訳の問題	35 (20)
外国語教育	30 (31)
外国語に関する紹介ほか	5 (4)

日本語の研究と教育	35 (40)
-----------	---------

マス・コミュニケーション	
マス・コミ一般	15 (8)
新聞	4 (4)
放送	13 (18)
宣伝・広告	12 (7)
出版	10 (18)

書評・紹介ほか	99 (112)
---------	----------

計 1,338 (1,639)点

上記のごとく、切り抜き点数は昨年よりも300点ほど少なかった。特筆すべき動向も見られなかったが、しいて記せば、川端康成氏のノーベル文学賞受賞を機にして、日本語、および、日本文学と翻訳の問題を各紙で取りあげ、種々の方面から論じられたことである。

また、分類別の点数で、各地の方言の項目が、例年に比して多いのは、西日本新聞に、「西日本の方言」が、10月からほぼ毎日連載され、切り抜かれたためである。

## 〔付〕 所外からの質問について

昭和43年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

計	43年										44年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
873	81	81	73	66	68	93	75	84	68	55	73	56	

今年度受けた質問件数は、昨年度よりも100件ほど多かった。内容は、例年どおり、多方面にわたっていた。用字用語について168件（たとえば、態勢・体制・体勢、形・型の使いわけなど、同音類義語についての質問が多かった。）、漢字の読み168件（このなかでは、表外漢字の読みについて39件、難訓の姓名について39件。）、かなづかい57件（とくに、「こんにちは」の“は”について、助詞の“へ”についての質問が目立って多かった。）、送りがな42件など。そのほか、敬語の使いかた、当用漢字、字体、文法、外来語、ローマ字の表記、研究所および研究所の刊行物についての照会なども、例年のとおり質問の多いものだった。電話質問のほかには、はがき・封書による質問が20通、直接研究所に来所され質問した人が15人ほどあった。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通ったもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曾根）

## 図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和43年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

### 図 書

受 入……………2,300冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他*	計
和書	1,017	171	258	670	2,116
洋書	97	35	52	0	184
計	1,114	206	310	670	2,300

\* 近代語研究室よりの保管転換（648冊）を含む。

### 逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入…………… 519種

	購 入	寄 贈	計
和	58**	420	478
洋	28	13	41
計	86	433	519

\*\*新聞（8種）を含む。

（鈴木）

# 庶務報告

## I 庁舎および経費

### 1 庁舎

所在敷地建物	東京都北区稲付西山町	
		10,030m <sup>2</sup>
本館	鉄筋コンクリート二階建	(延) 1,576m <sup>2</sup>
図書館	鉄筋コンクリート平家建書庫積層(3)	213m <sup>2</sup>
電子計算機室	鉄筋コンクリート平家建	118m <sup>2</sup>
その他付属建物		(延) 1,534m <sup>2</sup>
計		3,441m <sup>2</sup>

### 2 経費

昭和43年度予算総額		157,172,000円
	人件費	86,118,000円
	事業費	67,758,000円
	各所修繕	1,324,000円
	施設整備費	1,972,000円
昭和43年度文部省科学研究費補助金総額		870,000円
	試験研究	550,000円
	一般研究 (C)	210,000円
	奨励研究 (A)	110,000円

## II 評議員会

会長	久松 潜一	副会長	有光 次郎
	阿部 吉雄	石井 良助	江尻 進
	尾高 邦雄	高津 春繁	佐伯 梅友

佐々木八郎	沢田 慶輔	永井 健三
中島 文雄	中村 光夫	西尾 実
西脇順三郎	前田 義徳	松方 三郎
武藤俊之助	山本 有三	渡辺 茂

### Ⅲ 組織と職員

#### 1 定員

教官 35 事務官 16 その他 25 計 76

#### 2 組織および職員 (昭和44年3月31日現在)

	職名	氏名	備	考
国立国語研究所	所長	岩淵悦太郎		
第一研究部	部長	野元 菊雄	43. 4. 1	第一研究部長に昇任
話しことば研究室	室長	上村 幸雄		
		鈴木 重幸	43. 4. 1	横浜国立大学に出向
		中村 明	43. 7. 1	第二研究部国語教育研究室から配置換え
		高田 正治		
		衛藤 蓉子		
書きことば研究室	室長	西尾 寅弥		
		宮島 達夫		
		高木 翠		
		田原 圭子		
地方言語研究室	室長	徳川 宗賢	43. 4. 1	地方言語研究室長に昇任
		加藤 正信	43. 4. 1	東北大学に出向
		本堂 寛	43. 4. 16	一関工業高等専門学校から転任
		佐藤 亮一	44. 2. 1	主任研究官に昇任
		高田 誠	43. 4. 1	採用
		白沢 宏枝		
		山本 文子	43. 4. 1	第四研究部第二資料研究室から配置換え

	職 名	氏 名	備 考
第二研究部 国語教育研究室	非常勤	W. A. グロータース	
	部長	興水 実	
	室長	芦沢 節	
		村石 昭三	
		根本今朝男	
		天野 清	
		川又瑠璃子	
		福田 昭子	
		小林 信子	43. 6. 1 採用 43. 7. 1 第一研究部話しことば研究室から配置換え
	言語効果研究室	室長	高橋 太郎
第三研究部 近代語研究室		大久保 愛	43. 6. 1 主任研究官に昇任
		鈴木美都代	43. 6. 1 第三研究部近代語研究室から配置換え
		屋久 茂子	43. 5. 31 退職
	部長	斎賀 秀夫	43. 4. 1 第三研究部長に昇任
	室長(併)	斎賀 秀夫	43. 4. 1 近代語研究室長に併任 43. 6. 1 併任を解除
		飛田 良文	43. 4. 1 主任研究官に昇任 43. 6. 1 近代語研究室長に昇任
		松井 利彦	43. 4. 1 採用
		牧野 正子	
		中曾根 仁	
	第四研究部 第一資料研究室	部長	林 四郎
	室長	田中 章夫	43. 4. 1 第一資料研究室長に昇任
		南 不二男	
		江川 清	
		中野 洋	43. 4. 1 採用
		益子 芳江	
		堀江久美子	
		花井夕起子	

	職 名	氏 名	備 考	
第二資料研究室	室 長	飯豊 毅一		
		渡辺 友左		
		中島美智子	43. 6. 1 採用	
		東郷はるみ	43. 5. 20 退職	
		伊藤 菊子		
第三資料研究室	室 長	石綿 敏雄	43. 4. 1 第一資料研究室長から配置換え	
		土屋 信一		
		野村 雅昭		
		小幡 利子	44. 2. 1 第一資料研究室から配置換え	
		菅野 裕子	44. 1. 31 退職	
言語計量調査室	室長(併)	林 四郎		
		斎藤 秀紀		
		木村 繁		
		阿部 典子	44. 3. 31 退職	
		中野三千子	43. 7. 31 退職	
		篠田美代子		
		小高 京子		
		田中由紀子	43. 8. 1 採用	
		的場 益雄	43. 4. 1 東京教育大学学生部次長から配置換え	
		伊藤 仲二		
庶務部 庶務課	部 長	的場 益雄	43. 4. 1 東京教育大学学生部次長から配置換え	
	課 長	鈴木 元彦		
	課長補佐	伊藤 仲二		
		西山 博		
		岡本 まち		
会 計 課	課 長	根岸佐代子		
		田島 正幸		
		出牛清次郎	44. 3. 31 退職	
		課長補佐	三浦 清伍	
		渋谷 正則		



	職名	氏名	備考
図書館		鈴木 亨	
		筒井 士郎	
		金田 とよ	
		加藤 雅子	
		中村 佐仲	
		船倉 正章	
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		岩田 茂男	
	館長	(欠)	
		大塚 通子	
		大浪由紀夫	

#### Ⅳ 講演会と公開展示会の開催

昭和43年度は創立20周年にあたり、その記念行事として講演会と公開展示会とを下記要領により行なった。

##### 1. 講演会

日時 昭和44年2月15日(土) 午後1時～4時30分

場所 新宿 紀伊国屋ホール

あいさつ

一研究所と語彙研究一 所長 岩淵悦太郎

語彙調査と基本語彙 第四研究部長 林 四郎

形容詞の意味の特質 書きことば研究室長 西尾寅弥

講演会には、国語関係者、学校関係者等約300人が来会した。

##### 2. 公開展示会

日時 昭和44年2月22日(土) 午前11時～午後4時

場所 国立国語研究所

## 展示内容

各研究室の研究成果を要約して展示したほか、国立国語研究所20年のあゆみ、現代語音声の研究、幼児言語の全国調査、日本語地図、電子計算機による新聞の用語・用字等の資料を展示し、また明治初期における文章表記の実態をあらわす図書等を展覧に供した。

## V 内地留学生等の受け入れ

氏名	勤務・職名	研究題目	研究期間
大浦 信一	富山県西砺波郡福光町立福光中学校教諭	国語学習指導における個別化多様化について	昭和43. 4. 20から 6. 14まで
米萩 甚蔵	富山県高岡市立志貴野中学校教諭	学習指導法の改善（特に国語科を中心として）	昭和43. 10. 28から 11. 7まで
嘉藤 信夫	富山県新川郡上市町立上市中央小学校教諭	読解の基本的指導過程の研究	昭和43. 11. 11から 11. 24まで

ギェンター・ヴェンク

西独ハンブルク大学教授（日本語の接尾語の研究）

昭和43. 2. から  
10. まで

## VI 日 記 抄

1968. 5. 1 各省直轄研究所長連絡協議会昭和42年度下期定例総会（国立公衆衛生院で）
5. 10～11 第40回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議（東京芸術大学で）
5. 20～21 国立学校および所轄機関等庶務部課長会議（一橋講堂で）
5. 30 大妻女子大学職員浮田章一氏ほか学生16名研究所見学
6. 3～4 第27回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（日本都市センターで）

- 6. 4 文部省所轄研究所長会議（東京で）
- 6. 5 第21回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議（国立教育研究所で）
- 6. 5 大牟田市立橘中学校教諭河村昭義氏ほか教諭3名研究所見学
- 6.12～13 著作権講習会（都立教育研究所で）
- 6.26 埼玉大学教育学部助教授外山映次氏ほか学生30名研究所見学
- 7. 2 第67回国立国語研究所評議員会  
議事
  - 1. 会長選出について
  - 2. 国立国語研究所評議員会運営規則案について
  - 3. 昭和43年度研究計画について
  - 4. 地方研究員について
  - 5. 昭和44年度概算要求について
  - 6. その他
- 7. 9 文化庁附属機関長会議（国立教育会館で）
- 8. 2 昭和43年度東京地区労務管理協議会（東京商船大学で）
- 8.29 ユーゴスラビア・ノヴィサド大学言語学教授パウレヴィチェ・ミカイヴィチェ氏研究所見学
- 9. 4～5 昭和43年度文部省共済組合地区別事務担当者打合会（茨城大学で）
- 9.26～27 第41回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議（宇都宮大学で）
- 10. 3～4 第19回文部省所管研究所第3部会事務協議会（熱海で）
- 10.14～15 文部省所轄等研究所長会議（緯度観測所で）
- 10.26 甲南女子大学教授鎌田良二氏ほか学生6名研究所見学
- 11.11 岐阜大学附属中学校教諭高橋善昭氏ほか2名研究所見学
- 11.12 朝日新聞校閲副部長笠坊氏研究所見学
- 11.14 東京成徳短期大学教授篠田融氏ほか学生30名研究所見学
- 11.15～16 昭和43年度文部省所管研究所長会議第3部会（神戸市で）
- 12. 2 第68回国立国語研究所評議員会  
議事

1. 昭和44年度概算要求について
  2. 研究事業の中間報告について
  3. 20周年記念行事について
  4. その他
12. 20 国立国語研究所創立20周年記念日
12. 25 文化庁附属機関長会議（文化庁で）
1969. 2. 15 国立国語研究所創立20周年記念講演会（前記Ⅳ）
2. 18 ソビエト・ルムンパ大学教授アーラ・アキーシナ氏研究所見学
2. 22 国立国語研究所創立20周年記念公開展示会（前記Ⅳ）
3. 14 文化庁附属機関長会議（国立教育会館で）
3. 19 第69回国立国語研究所評議員会  
議事
1. 研究報告
  2. 昭和44年度の予算の内示について

昭和45年1月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町  
電話東京(900)3111(代表)

UDC 058 495.6  
NDC 810.5

901

本書の市販品発行所  
東京都新宿区市ヶ谷左内町39 (260)5281  
株式会社 秀英出版

## 国立国語研究所刊行書一覽

### 国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	290円
2	言語生活の実態 <small>—白河および付近の農村における—</small>	"	品切れ
3	現代語の助詞・助動詞 <small>—用法と実例—</small>	"	"
4	婦人雑誌の用語 <small>—現代語の語彙調査—</small>	"	500円
5	地域社会の言語生活 <small>—鶴岡における実態調査—</small>	"	600円
6	少年と新聞 <small>—小学生・中学生の新聞への接近と理解—</small>	"	180円
7	入門期の言語能力	"	200円
8	談話語の実態	"	品切れ
9	読みの実験的研究 <small>—音読にあらわれた読みあやまりの分析—</small>	"	"
10	低学年の読み書き能力	"	"
11	敬語と敬語意識	"	"
12	総合雑誌の用語 <small>—現代語の語彙調査—</small>	"	"
13	総合雑誌の用語 <small>—現代語の語彙調査—</small>	"	"
14	中学年の読み書き能力	"	400円
15	明治初期の新聞の用語	"	400円
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	品切れ
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	"
18	話しことばの文型(1) <small>—対話資料による研究—</small>	"	600円
19	総合雑誌の用字	"	80円
20	同音語の研究	"	550円
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) <small>—総記および語彙表—</small>	"	1,000円
22	現代雑誌九十種の用語用字(2) <small>—漢字表—</small>	"	1,000円
23	話しことばの文型(2)	"	550円
24	横組みの字形に関する研究	"	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) <small>—分析—</small>	"	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程	秀英出版刊	750円

28	類義語の研究	"	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	"	400円
30-1	日本語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本語地図(2)	"	"
30-3	日本語地図(3)	"	8,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	350円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	"	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	"	350円
34	電子計算機による国語研究(2)	"	450円

#### 国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙 —現代新聞用語の一例—	調査	" 品切れ
3	送り仮名法資料集	"	"
4	明治以降国語関係刊行書目	"	300円
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	3,000円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円

#### 国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	"	750円
3	ことばの研究 第3集	"	800円

#### 国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	11	昭和34年度	220円
2	昭和25年度	"	12	昭和35年度	350円
3	昭和26年度	160円	13	昭和36年度	160円
4	昭和27年度	160円	14	昭和37年度	220円
5	昭和28年度	240円	15	昭和38年度	250円
6	昭和29年度	200円	16	昭和39年度	250円
7	昭和30年度	200円	17	昭和40年度	250円
8	昭和31年度	220円	18	昭和41年度	300円
9	昭和32年度	200円	19	昭和42年度	300円
10	昭和33年度	220円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和 29 年 版	450円	昭和 37 年 版	品切れ
昭和 30 年 版	600円	昭和 38 年 版	950円
昭和 31 年 版	450円	昭和 39 年 版	980円
昭和 32 年 版	480円	昭和 40 年 版	1,100円
昭和 33 年 版	480円	昭和 41 年 版	1,100円
昭和 34 年 版	品切れ	昭和 42 年 版	1,100円
昭和 35 年 版	550円	昭和 43 年 版	1,200円
昭和 36 年 版	800円	昭和 44 年 版	1,500円

---

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 共著 日本新聞協会	秀英出版刊	280円
青年とマスコミュニケーション	日本新聞協会 共著 国立国語研究所	金沢書店刊	品切れ



1968 — 1969

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL  
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1968 to March 1969

Contrastive Study of Dialect Grammars

Cineradiographic Study of Articulatory Movements

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Mastering of Chinese Characters by Junior High School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Power

Study on the Expressional Function and the Communication

Effect of Japanese

Study on the Language of the Meizi Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Basic Study on the Relation between Language and Social  
Structure

Study on the Writing System of Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO